新潟県埋蔵文化財調査報告書　第244集

北陸新幹線関係発掘調査報告書ＸＸⅢ

姫 御 前 遺 跡 Ⅲ

２０１３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書ＸＸⅢ

姫御前遺跡Ⅲ

２０１３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市を経て大阪府に至る総延長 700km の新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏･関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業･経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成 24 年度に実施した姫御前遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、弥生時代から古墳時代と室町時代の遺跡であることが明らかになりました。古墳時代には、集落が営まれていたことが分かり、隣接する竹花遺跡で検出された水田と合わせて、当時の景観を知る上で貴重な情報となりました。また、室町時代には周辺に水田が広がっており、そこで木製品を使った祭祀が行われていたことも明らかになりました。香や茶に関する道具などの高級品も多数発見され、付近に有力者が存在したことをうかがい知ることができます。

今回の調査資料と本報告書が、糸魚川地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

新潟県教育委員会

教 育 長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本書は、新潟県糸魚川市東寺町二丁目1069番地1ほかに所在する姫御前遺跡の発掘調査記録である。なお、2006・2008年度に調査し、『姫御前遺跡Ⅰ』及び『姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』として報告書を刊行している。したがって、本書を『姫御前遺跡Ⅲ』とする。

2　この調査は、北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

3　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社ノガミに委託して、2012年度に発掘調査を実施した。

4　出土遺物及び調査に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合せ願いたい。

5　遺物の注記は姫御前遺跡の略記号を「12ヒメゴ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。

6　本文の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　遺物番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

8　図版中のトーンは、各図版に凡例を示した。また、断面スミ塗りの土器実測図は須恵器を表す。

9　引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］示し、巻末に一括して掲載した。また、作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。

10　自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った。

11　遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社ノガミに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。

12　本書の執筆は、加藤　学（埋文事業団　班長）、石垣義則（株式会社ノガミ　調査員）が当たり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章1、第Ⅳ章3D、第Ⅴ章3、第Ⅶ章：加藤

第Ⅱ章2、第Ⅲ章、第Ⅳ章1・2・3A～C、第Ⅴ章1・2・4・5：石垣

第Ⅵ章：株式会社加速器分析研究所

目　　次

第Ⅰ章　序　　説……1

1　調査に至る経緯 ……1

2　試掘・確認調査の結果……2

A　調査の体制 ……2

B　調査の結果と取扱い ……2

3　本発掘調査と整理作業の経過 ……3

A　調査・整理の体制 ……3

B　調査の経過 ……3

C　整理作業の経過 ……4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 ……5

1　地理的環境……5

2　歴史的環境……7

第Ⅲ章　調査の概要……12

1　グリッドと調査区の設定 ……12

2　基 本 層 序……12

3　調査の概要……13

第Ⅳ章　遺　　構……14

1　概　　要……14

2　中世の遺構……14

3　古墳時代前期の遺構 ……14

A　土　　坑 ……14

B　柱　　穴 ……14

C　倒　木　痕 ……15

D　樹　　根 ……15

第Ⅴ章　遺　　物……16

1　概　　要……16

2　土器・陶磁器 ……16

A　中世～近世の土器・陶磁器 ……16

1）椀　　類……17

2）皿　　類……17

3）水注・盤・鉢・瓦器……18

4）甕　　類……18

5）壺　　類……19

6）片口鉢・擂鉢類……19

7）加 工 円 盤……19

8）土　　錘……19

B　古代の土器 …… 20
C　弥生時代～古墳時代の土器 …… 20
1）土器の分類……20　2）各　説……20
3　石器・石製品 …… 21
4　金属製品・鍛冶関連遺物 …… 21
5　木　製　品…… 22

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 23
1　姫御前遺跡出土木材の樹種 …… 23
A　はじめに …… 23
B　試　料 …… 23
C　分析方法 …… 23
D　結　果 …… 23
E　考　察 …… 24
2　姫御前遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） …… 24
A　測定対象試料 …… 24
B　測定の意義 …… 24
C　化学処理工程 …… 24
D　測定方法 …… 25
E　算出方法 …… 25
F　測定結果 …… 26

第Ⅶ章　ま　と　め…… 27
1　旧地形の復元 …… 27
2　弥生時代後期 …… 28
3　弥生時代終末期～古墳時代前期…… 29
4　古墳時代中期初頭 …… 29
5　古墳時代中期・後期…… 30
6　古　代…… 30
7　中　世…… 30

《要　約》…… 32
《引用・参考文献》 …… 33

《観　察　表》…… 35
遺構観察表　土坑・ピット……35
遺物観察表　中近世土器・陶磁器（１）……35
遺物観察表　中近世土器・陶磁器（２）……36
遺物観察表　弥生時代～古墳時代土器……37
遺物観察表　石器・石製品、鍛冶関連遺物……37
遺物観察表　銭　　貨 ……37
遺物観察表　木　製　品 ……37

挿図目次

第１図　北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置 …… 1
第２図　確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲 …… 4
第３図　糸魚川・静岡構造線 …… 5
第４図　青海川の硬玉産地 …… 5
第５図　小滝川の硬玉産地 …… 5
第６図　親不知海岸 …… 6
第７図　位置と周辺の地形 …… 7
第８図　周辺の主な遺跡 …… 8
第９図　鉄滓・羽口出土分布図 …… 22
第10図　木材の顕微鏡写真 …… 23
第11図　暦年較正年代グラフ …… 26

挿表目次

第１表　中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数 …… 17
第２表　中世土師質土器皿の分類 …… 18
第３表　加工円盤の分類 …… 19
第４表　姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表 …… 19
第５表　各遺跡における出土銭貨数量表 …… 21
第６表　樹種同定結果 …… 23
第７表　測定結果（補正値）…… 26
第８表　測定結果（非補正値）…… 26
第９表　弥生時代～古墳時代の編年と実年代 …… 28
第10表　中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数 …… 31

図版目次

［図面図版］
図版１　全体図
図版２　2012年度調査区　全体図
図版３　遺構分割図
図版４　遺構個別図
図版５　中近世の土器・陶磁器（１）
図版６　中近世の土器・陶磁器（２）、弥生時代から古墳時代の土器
図版７　石器・石製品、銭貨、鍛冶関連遺物、木製品

［写真図版］
図版８　遺跡近景、７区全景
図版９　遺跡近景、７・８区全景、SX826・SX827検出状況、基本層序②
図版10　SX825、P806、P811、SK819、箸状木製品・銭貨出土状況
図版11　中近世の土器・陶磁器（１）
図版12　中近世の土器・陶磁器（２）、弥生時代から古墳時代の土器
図版13　石器・石製品、銭貨、鍛冶関連遺物、木製品

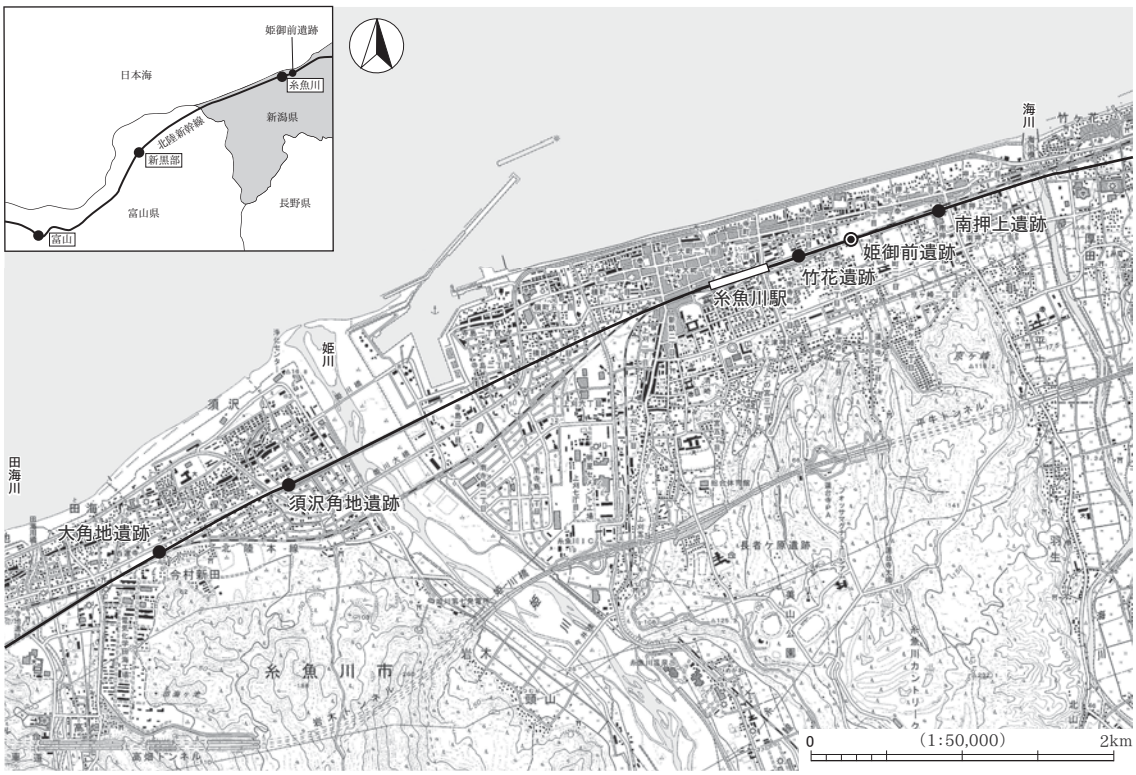
第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を経由し、新大阪に至る延長約 700km（うち東京･高崎間 105km は上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎･長野間は、1997 年 10 月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約 110km の区間は、1993 年 9 月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、2001 年 4 月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格化が決定した。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査、試掘・確認調査等に関する協議が本格化した。

2001 年 5 月、鉄道･運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年 10 月に分布調査を実施した。その結果、周知の姫御前遺跡で土師器片を採集したこと等から、周辺地域の試掘・確認調査が必要である旨を報告した。これを受けて 2005 ～ 2007 年度に試掘・確認調査を行い、姫御前遺跡 6,720㎡ につい



［国土地理院「糸魚川」「梶尾敷」（平成 14 年発行) 1:25,000 原図］

第 1 図　北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

て本発掘調査が必要と判断し、2006・2008 年度に本発掘調査を完了した。

その後、2012 年 2 月、姫御前遺跡 5 区隣接地で寺町融雪基地建設が行われることが鉄道・運輸機構から伝達され、本発掘調査を行う必要性について照会があった。それまでに行った調査の結果を踏まえれば、ここには遺構・遺物が残存していると考えられ、融雪基地建設に伴い本発掘調査が必要であると 2012 年 2 月 20 日の協議で回答した。

これを受け鉄道・運輸機構は県教委に本発掘調査を依託し（2012 年 3 月 8 日付け鉄運北・二用一第 120206001 号）、調査体制である県教委は埋文事業団に依頼した（2012 年 3 月 22 日付け教文第 1408 号の 2）。

2　試掘・確認調査の結果

A　調 査 の 体 制

【2005 年度】

調査期間	2005（平成 17）年 5 月 10 日～ 5 月 12 日、11 月 16 日～ 11 月 29 日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）		
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総　　括	波多　俊二	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長）
管　　理	長谷川二三夫	（　同	総務課長）
庶　　務	長谷川　靖	（　同	班長）
調査総括	藤巻　正信	（　同	調査課長）
調査担当	寺﨑　裕助	（　同	担当課長代理）
調査職員	尾崎　高宏	（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係	主任調査員）
	田中　一穂	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	嘱託員）

【2006・2007 年度】

調査期間	2006（平成 18）年 7 月 21 日、2007（平成 19）年 9 月 26 日～ 10 月 12 日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）		
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総　　括	波多　俊二	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長）2006 年度
	木村　正昭	（　同	事務局長）2007 年度
管　　理	斎藤　　栄	（　同	総務課長）
庶　　務	長谷川　靖	（　同	班長）
調査総括	藤巻　正信	（　同	調査課長）
調査担当	田海　義正	（　同	担当課長代理）
調査職員	田中　一穂	（　同	嘱託員）

B　調査の結果と取扱い

試掘・確認調査は、上記のとおり 3 か年にわたって実施した。調査対象地に任意に試掘坑を設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行って、遺構・遺物の有無を確認した。その後、トレン

チ位置、土層の堆積状況等を図面・写真に記録した。調査の結果、古墳時代の遺物包含層が、第２図 17－⑧Ｔ～ 19 － 4 Ｔまでの間に存在することを確認した。そして、3 か年の試掘・確認調査によって、総延長 425m にわたる 6,720㎡ について本発掘調査が必要と報告した。なお、これまでに本発掘調査を行った面積は、施工方法との照合等から若干の増減があり、合計で 6,800㎡（姫御前Ⅰ:3,120㎡、姫御前Ⅱ:3,680㎡）である。今回は、姫御前遺跡５区の北側に隣接する 227㎡を対象として調査を実施した。

3　本発掘調査と整理作業の経過

A　調査・整理の体制

調査期間	2012（平成 24）年 7 月 2 日～ 8 月 24 日		
整理期間	2012（平成 24）年 7 月 9 日～ 2013（平成 25）年 1 月 31 日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）		
調　　査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総　　括	木村　正昭	（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	事務局長）
管　　理	熊倉　宏二	（　同	総務課長）
庶　　務	伊藤　　忍	（　同	班長）
調査総括	北村　　亮	（　同	調査課長）
指　　導	田海　義正	（　同	担当課長代理）
調査担当	加藤　　学	（　同	班長）
支　　援	株式会社ノガミ		
	現場代理人	伊藤正紀	
	調査員	石垣義則	
	調査員補	佐藤　俊	
	補助員	武田裕紀子	

B　調 査 の 経 過

施工を急ぐことから、調査を早急に実施してほしい旨の要望があったため、2012 年度当初から発掘調査に着手できる体制を整えた。しかし、土留工事の遅れに伴い、調査着手は 7 月初旬となった。当年度の本発掘調査対象範囲は、土留めで囲われた調査区・7 区と、土留めなしの調査区・8 区がある（図版２）。調査の工程上、7 区の調査を完了させたのち、8 区を調査した。

調査は 7 月 2 日から開始した。7 区の表土掘削を 7 月 2 日・3 日に行い、4 日から作業員を本格的に投入した。遺物包含層の掘削を開始したところ、地山までの深さが浅いところでは 10㎝、深いところでは 50㎝以上あり、起伏に富んだ地形を検出した。遺構の分布は希薄であったが、遺物包含層中に遺物がまんべんなく存在したため、上位から順に掘削した。8 月上旬には完掘し、8 月 8 日に全体写真の撮影及び測量を行い、夏季休暇に入った。夏季休暇明けに 8 区の調査に着手した。土留めを行っていないため、湧水が著しく、機械と人力を併用して遺物包含層を掘削した。遺構は検出されず、写真撮影・測量を行い 8 月 24 日で調査が完了した。

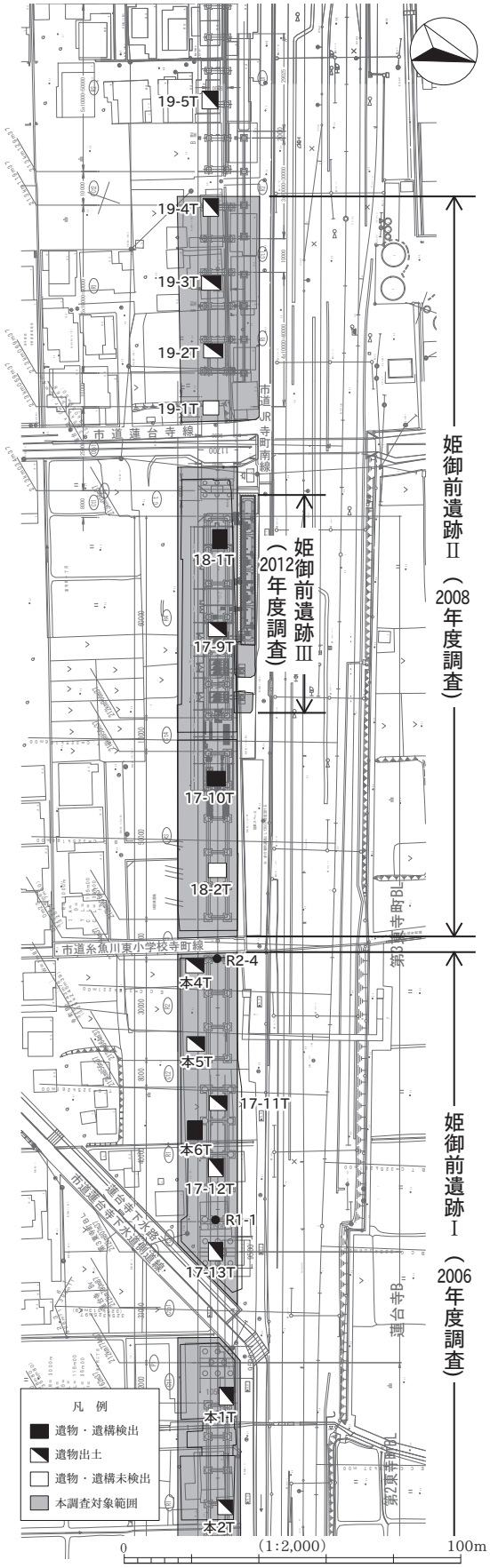
8 月 23 日に鉄道運輸機構と現地の引き渡し協議を行ったところ、土留めを行っていない調査区は、降

雨によって水没するため､埋め戻すよう要望があった。そこで急遽、準備を行い、8月27日・28日に埋め戻し作業を行い、現地作業を完了した。

なお、2008年度調査区と2012年度調査区の間には、幅2～2.5mの未調査範囲が発生してしまった。両者は、本来、一体的に調査すべき事業であるが、分割した結果、このような事態を招いてしまった。今後は開発事業の内容を正確に把握し、できる限り分割せずに一体的に調査できるよう、事前協議の段階から綿密に打ち合わせる必要がある。一体的に調査することで、より充実した調査成果を得られ、調査期間・費用の縮減においても益するところが大きい。

C　整理作業の経過

土留工事の遅れにより調査に着手できなかった4月～6月の間に前文の執筆等を行い、準備作業を進めた。調査着手後は、調査と併行して整理作業を行った。遺構の記録類については、現地で基礎整理を進めた。遺物は、株式会社ノガミ亀田整理室に順次運搬し、水洗・乾燥・注記・選別・実測・トレースを行った。なお、編集業務と印刷・製本業務を株式会社ノガミに委託することとした。2013年1月中に図版類と原稿を完成させ、編集業務担当に素材を提供した。また、放射性炭素年代測定を加速器分析研究所に委託した。12月28日が納期であったため、この部分の編集業務と、その結果を受けたまとめ原稿執筆を1月に行った。2013年1月～2月に編集・校正を行い、2月に起案、決裁した。その後、再度、校正を行い、2013年3月に印刷・刊行した。



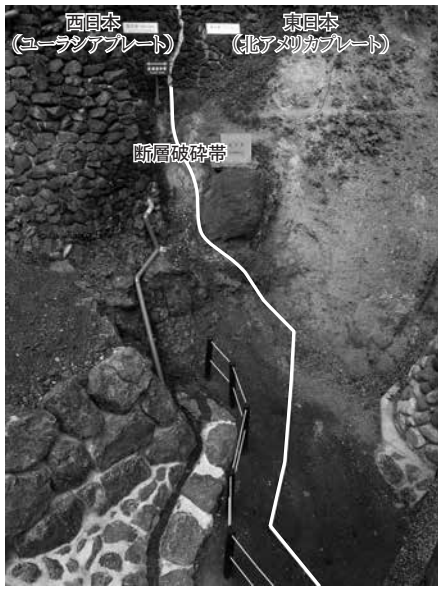
第２図　確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

姫御前遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南は長野県、西は富山県と接する。糸魚川は国史跡・松本街道の基点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ 30 里（120㎞）に及ぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県に通じる一般国道 148 号・JR 大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・一般国道８号・JR 北陸本線の交点に当たる交通の要所となっている。

糸魚川市には、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁に当たる「糸魚川－静岡構造線」が分布する（第３図）。この構造線を境界に、地質学的に西日本と東日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海－蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海－蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造をなしており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ひすい輝石岩は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている（第４・５図）。一方、この構造線以東の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なる。このこ



第３図　糸魚川・静岡構造線

第４図　青海川の硬玉産地

第５図　小滝川の硬玉産地

とが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらには言語・風俗文化にも影響を与えることとなったと言われている。

第６図　親不知海岸

市域の南側には、飛騨山脈と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,768m）をはじめとして 2,000m 級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ、日本海に没している。この急崖が親不知海岸であり、東西文化の障壁となった（第６図）。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、その背後には本県唯一の活火山である焼山（2,400m）がある。標高 400m 以下の小起伏山地は、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地滑りが発生する［鈴木 2000］。地滑り等防止法制定の契機となった柵口地滑り（1947 年発生）など、地滑り地が多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海（おうみ）川・田海（とうみ）川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約 60㎞に及ぶ。河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで６段に細分されている［鈴木 1983］。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下るにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させていると理解されていた［寺崎 1988］。しかし、北陸新幹線・国道８号糸魚川東バイパスの建設に伴い発掘調査されている海川右岸の六反田南遺跡では、地表下約 2m、標高約 3.5m の沖積地で縄文時代中期の集落も検出した［山本ほか 2012］。この発見により、土地利用のあり方を大きく見直す必要が生じた。

河川はいずれも急流で、かつ海底が深いこともあり、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東－南西に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口の左岸の須沢では最大幅 300m、最大高 11.5m を測る［鈴木 1983］。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に立地している。

姫御前遺跡は、この限られた平坦地に位置し、地形区分上は砂丘列と丘陵に挟まれた沖積地（三角州）に当たる。北側に広がる海岸砂丘上は加賀街道が通り、その両側に近世集落が築かれている。当遺跡周辺は、この集落よりも１m ほど標高が低く、古墳時代中期～後期以降、水田として利用されてきた範囲に相当する［加藤 2012］。

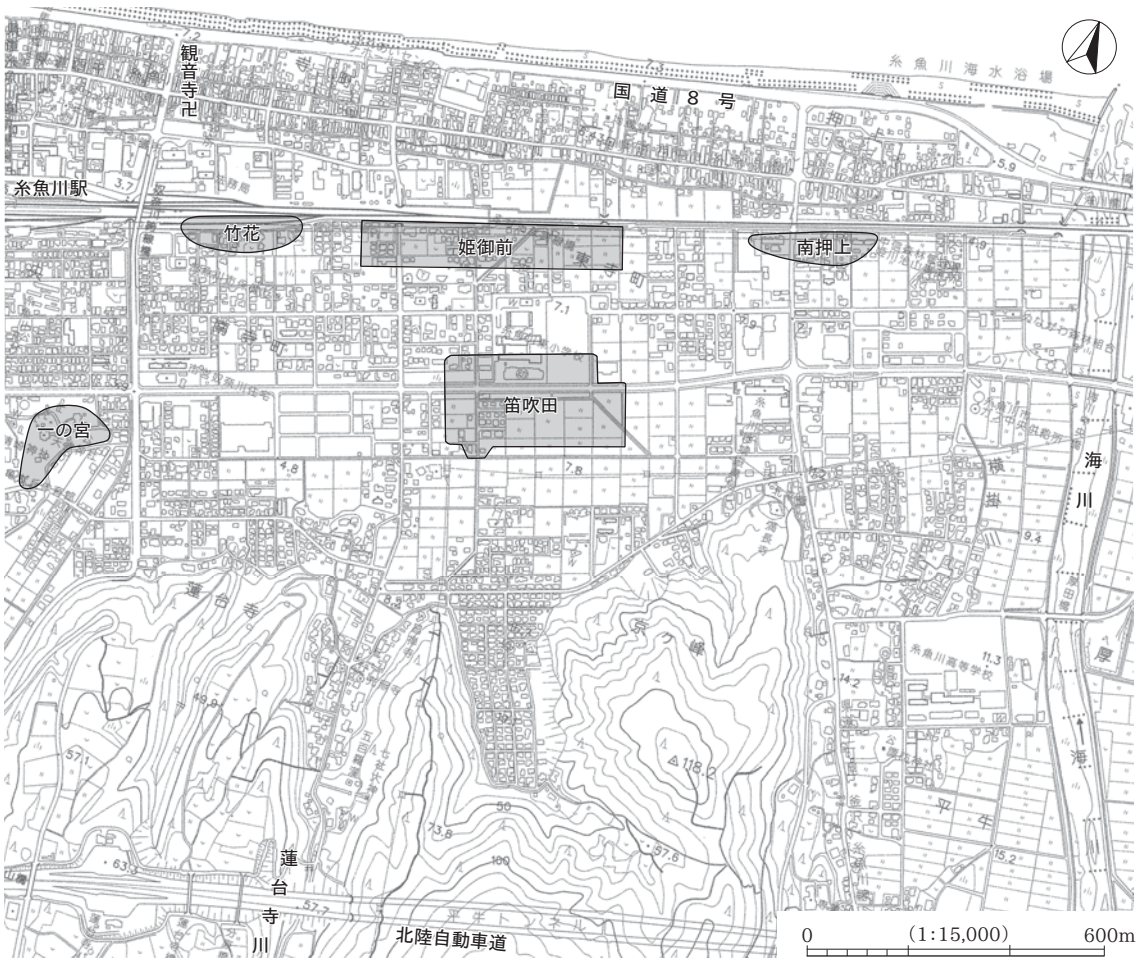
2　歴史的環境

糸魚川市域における古墳時代から中世の主な遺跡の分布は、第７・８図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では標高 100m 以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高 50m 前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。近年の北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、狭い平野部に遺跡が濃密に分布することが明らかとなった。ここでは、姫御前遺跡に関連する古墳時代から中世の遺跡について概観する。糸魚川市周辺の弥生時代から中世の遺跡の存続期間については、［春日 2008］を参考にした。

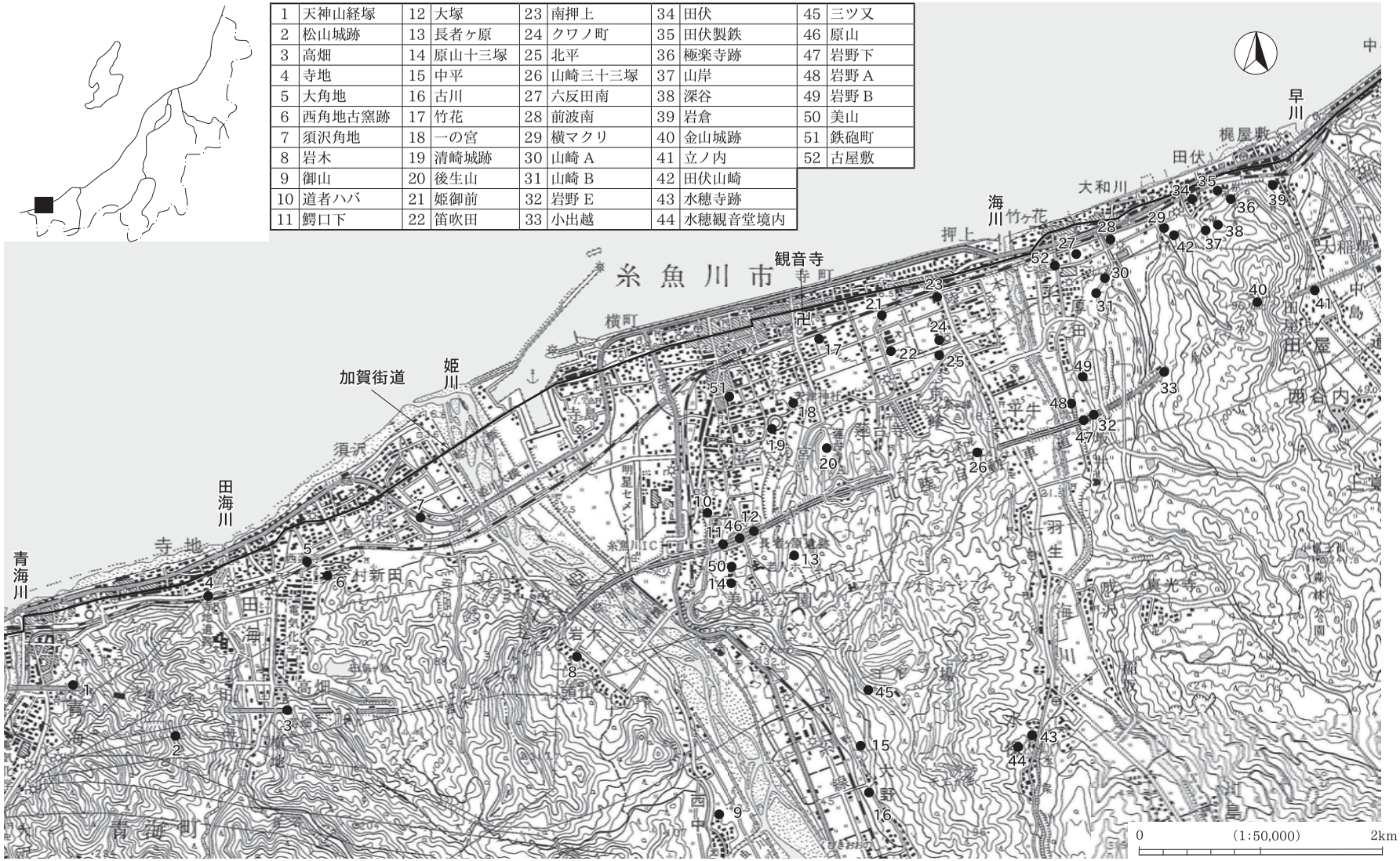
古墳時代

古墳時代の遺跡は、石材原産地を背景に玉作に関連する遺跡が多数存在する。青海地区の大角地（おがくち）遺跡（５）をはじめ、糸魚川地区では笛吹田（ふえふきだ）遺跡（22）、南押上遺跡（23）が代表的である。これらを含めた新潟県内の玉作遺跡については、寺村光晴氏・関雅之氏が詳細にまとめている［寺村 1986、関 2004］。

大角地遺跡（５）は、1935（昭和 10）年８月９日の東京朝日新聞（現、朝日新聞）新潟版に「石器時代の玉作り遺跡か」と紹介されている［日本考古学会 1935］。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり学会で注目され、勾玉の製作過程「オガクチ技法」［寺村 1966］の標識遺跡として知ら



第７図　位置と周辺の地形（「糸魚川市都市計画図 1:10,000」をもとに作成）



1	天神山経塚	12	大塚	23	南押上	34	田伏	45	三ツ又
2	松山城跡	13	長者ヶ原	24	クワノ町	35	田伏製鉄	46	原山
3	高畑	14	原山十三塚	25	北平	36	極楽寺跡	47	岩野下
4	寺地	15	中平	26	山崎三十三塚	37	山岸	48	岩野 A
5	大角地	16	古川	27	六反田南	38	深谷	49	岩野 B
6	西角地古窯跡	17	竹花	28	前波南	39	岩倉	50	美山
7	須沢角地	18	一の宮	29	横マクリ	40	金山城跡	51	鉄砲町
8	岩木	19	清崎城跡	30	山崎 A	41	立ノ内	52	古屋敷
9	御山	20	後生山	31	山崎 B	42	田伏山崎		
10	道者ハバ	21	姫御前	32	岩野 E	43	水穂寺跡		
11	鰐口下	22	笛吹田	33	小出越	44	水穂観音堂境内		

第８図　周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は［土田 1991］による。）［国土地理院「糸魚川」（平成８年発行）、「小滝」（平成 15 年発行）1:50,000 原図］

れる。1970・73（昭和45・48）年には発掘調査が行われ、工作用特殊ピットをもつ玉作工房が検出され、前期から中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土した［寺村ほか1979］。

笛吹田遺跡（22）は前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、臼玉・勾玉・管玉等が出土し、玉作用特殊ピットが検出されている［寺村ほか1978］。その後の発掘調査では、琴柱形石製品（蛇紋岩製）の一種である工字状石製品も出土している［山岸2010］。なお、笛吹田遺跡は、1962（昭和37）年時点では「姫御前遺跡」として登録されており、1975（昭和50）年に別個の遺跡とされるまでは、同一の遺跡として捉えられてきた経過がある［土田1978］。両遺跡の間に遺跡の空白が存在するとされるが、年代的に重複することから無関係とは言えない。

南押上遺跡（23）では前期中葉から後葉の玉作遺跡が検出された。大量の玉作関連遺物が出土し、特に前期後葉の棗玉の成品・未成品の発見は、全国的にも類例が少なく貴重な調査事例である［小池ほか2011］。

一の宮遺跡（18）は、1919（大正８）年に東京帝室博物館の高橋健自氏によって発掘調査され、前期の土器とともに有孔円盤・勾玉・臼玉等が出土しており［糸魚川市役所1986］、玉類は大角地遺跡・笛吹田遺跡・田伏遺跡等の玉作遺跡との関連が指摘されている［関1972］。

田伏遺跡（34）は、1970（昭和45）年に発掘調査が行われ、滑石製の臼玉・管玉・勾玉・子持勾玉・紡錘車の製作関連資料が多数出土した［関1972］。出土した土器は中期中葉から後期（５世紀後半～６世紀後半）に比定される。

玉作関連遺跡は沖積地や丘陵裾部に限らず、海岸部から約3.3㎞内陸の河岸段丘上に立地する三ツ又遺跡（45）等でも見つかっている［糸魚川市役所1986］。その他に、当遺跡、横マクリ遺跡（前期）（29）、六反田南遺跡（27）においても小規模な玉作が確認されている。なお、現時点において、糸魚川市域で古墳は確認されていない。

また、糸魚川市域では弥生時代後期から水田稲作を中心とする農耕社会が構築されており、その一端は当遺跡や竹花遺跡（17）で水田を検出したことからもうかがえる［加藤ほか2011a、相羽ほか2011］。特に、2008（平成20）年の発掘調査では、畦畔が沈下しないよう板材を敷き詰める例や畦畔中から多数の木製品が出土する例が認められ、古墳時代の水田稲作技術や農耕に関連する祭祀を解明する上で注目される［加藤ほか2011a］。

古　　代

越後国の成立については、［米沢1980･山田1986］が詳しい。越国に政府の蝦夷対策として、647（大化３）年に渟足柵、648（大化４）年に磐舟柵が設置されたことが、『日本書紀』に記されている。７世紀末頃、それまで越国とされていた地域が細分され、越前国･越中国･越後国･佐渡国が成立したと見られる。702（大宝２）年に越中国４郡（蒲原郡・古志郡・魚沼郡・頸城郡）が越後国に移管され、708（和銅元）年には越後国に出羽郡が成立する。712（和銅５）年に出羽郡が越後国から分離、独立して出羽国が成立した。後に出羽国には陸奥国最上・置賜両郡が編入されることとなる。８世紀前葉には越後国の領域がほぼ確定し、現在の新潟県の原形ができあがる。『和名類聚抄』には頸城郡の郷名（沼川･都有･栗原･荒木･板倉･高津･物部・五十公・夷守・佐味）が記載され、そのうち糸魚川市は頸城郡沼川郷に属する。沼川郷の郷域は、上越市直江津より越中国に至るまでの海岸地域をさし、『大日本地名辞書』［吉田1907］には糸魚川市青海市振から糸魚川市早川谷までの地域とある。なお、当時の越後国府の場所は明らかではないが、『和名類

聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

古代では中央と地方を結ぶ交通制度として、官道（駅路）に沿って約 16km ごとに馬家を設ける駅制が整備された。越後国の駅制については、米沢康氏・木村宗文氏がまとめている［米沢 1976・木村 1986a］。『延喜兵部省式』に「越後国駅馬 滄海８疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各５疋、伊神２疋、渡戸舟２艘伝馬 頸城･古志郡各８疋」と記されている。駅馬とは駅鈴と持つ公用の役人（駅使）が乗用する馬で、伝馬とは公用旅行者（伝使）が乗用する馬である。滄海駅は糸魚川市青海地区に比定され、滄海駅が他の駅よりも多い８疋の駅馬をかかえていたのは、親不知・子不知の難所をひかえていた為と考えられる。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられ、鰐口下遺跡（11）で小泊産須恵器が出土することからもうかがえる［鈴木・高橋ほか 1989、坂井 1996］。なお、『延喜式神名帳』に記載されている頸城郡の神社は 13 社あり、そのうち奴奈川神社は沼川の郷名と一致し、現在の天津神社境内の奴奈川神社に比定される［木村 1986b］。

青海地区（旧青海町域）は古代滄海駅の推定地である。須沢角地遺跡（７）は、1987（昭和 62）年、2007（平成 19）年の発掘調査によって、７世紀末～９世紀前半の集落であることが明らかとなった［土田ほか 1988、今村・山岸 2008］。埋文事業団も４か年にわたる発掘調査を行い、竪穴建物６棟、掘立柱建物８棟、畑作溝４か所などを検出したが、滄海駅の存在を積極的に支持する資料は得られていない。遺物は、８世紀後葉～９世紀前半のものが大半で、須恵器のなかには焼歪みが顕著なものや溶着するものが見られた。それらは西方 500m に位置する西角地（にしがくち）古窯跡（６）との積極的な関係がうかがえる［加藤ほか 2011b］。西角地古窯跡は、窯体や灰原が削平により不明であるが、整理箱 10 箱分の須恵器が出土している［千家・山本 1979］。窯跡の時期は、８世紀末～９世紀初頭前後と考えられている［春日 1998］。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）では、これまでに丘陵部で多くの遺跡が発掘調査されており、主な遺跡として、道者ハバ遺跡（10）･原山遺跡（46）･大塚遺跡（12）･山崎Ａ遺跡（30）･岩野下遺跡（47）･小出越遺跡（33）･山岸遺跡（37）がある。山崎Ａ遺跡では平安時代の竪穴建物 25 軒、掘立柱建物 29 棟が検出され、中には床面積が 150㎡を超える大型の掘立柱建物も２棟含まれる。さらに、饗宴に伴う大量の土師器を廃棄した土坑も見つかっている［木島 2010］。小出越遺跡からは８世紀末～９世紀の土師器焼成遺構が検出された［鈴木ほか 1988］。また、山岸遺跡では建物跡は未検出だが、９世紀後半から 10 世紀の土坑・溝・畑作溝・水田・河道が検出され、製塩土器や漁撈・紡績に関係する遺物が出土した［春日ほか 2012］。

近年では沖積地においても、鉄砲町遺跡（51）･六反田南遺跡（27）･前波（ぜんなみ）南遺跡（28）･田伏山崎遺跡（42）などで古代の遺構・遺物が見つかっている。前波南遺跡では、古代の溝から大足の横木、棒状木製品のほかに、「出雲真山」と書かれた木簡が出土している。「出雲」の文字が含む木簡は、当時の出雲（島根県）や都（京都府）以外で出土することは稀で、糸魚川と出雲の密接な関係を示す資料として注目される［石川ほか 2010］。田伏山崎遺跡では、古代の自然流路から墨書土器や斎串が、川岸からは八稜鏡や腰帯石銙が出土し、祭祀行為をうかがわせる。また、大量の製塩土器が出土しているが、製塩関連の遺構は未検出である［佐藤ほか 2009］。

中　　世

中世に入ると、これまでの政治や経済活動に大きな変化が見られる。そのひとつは土地支配で、古代律令における国や郡を単位とするものから、荘園や国衙領（保・郷など）からなる荘園公領制へと変わる。越後国の荘園と国衙領については、荻野正博氏が詳細に論じている［荻野 1986］。頸城郡には佐味荘以

外に荘園がなく、国衙領が支配する。糸魚川市域は沼川保に属しており、律令制下の沼川郷域に成立したことからも、郷名がそのまま保名になったと考えられる。史料上の初出は、糸魚川市天津神社懸仏の1449（文安６）年６月20日付けの裏板墨書銘に、「越後国沼川保一宮天津社」とある。

青海地区では、沖積地に位置する遺跡が少なく、丘陵部に山城や経塚が存在する。寺地遺跡（４）では、室町時代から江戸時代の掘立柱建物１棟が検出され、祭祀をうかがわせる多くの木製品が出土している［相羽ほか2002］。須沢角地遺跡（７）では中世の水田跡が検出され、また別の調査区からは箸状木製品・人形など祭祀に関係する遺物が出土している［加藤ほか2011b］。松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（２）は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯曲輪・裾曲輪で幾重にも固められている［平野・渡辺1986］。天神山経塚（１）は、1919（大正８）年に調査され、1167（仁安２）年の銘のある珠洲焼の経筒が見つかっている［金子1975］。

糸魚川地区では、段丘から丘陵裾部に水穂観音堂境内遺跡（44）、山崎Ａ遺跡（30）、立ノ内遺跡（41）などがあり、特に山岸遺跡（37）の発掘調査成果が注目される。12～14世紀の集落跡が見つかり、12世紀後半の集落跡では、平面積100㎡を超える大型の掘立建物が検出された。また、農業・漁撈・紡績・木工などの生業に関わる遺物も多数出土し、豊かな集落であったと考えられている。平面積180～200㎡の掘立柱建物（13世紀中葉から後半）や庭園をもつ100～190㎡の掘立柱建物（13世紀末～14世紀初頭）も検出されている。さらに傘紋入り長柄の銚子が出土したことも含め、北条一門の名越氏に関連する屋敷地の可能性が高いと考えられている［春日ほか2012］。

当地域における中世の集落は、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、沖積部に多数存在することが明らかとなった。竹花遺跡（17）、六反田南遺跡（27）、前波南遺跡（28）で中世の遺構・遺物が見つかっている。竹花遺跡は水田のみの検出であったが、多数の陶磁器類や人形・動物形・刀形・舟形等の祭祀に関する木製品も出土している。陶磁器の質の高さ、量・種類の多さは県内有数の内容で、茶の湯や香を嗜むことのできる財力のある階層が近隣に存在したことがうかがえる［加藤ほか2011a］。

また、中世の遺物で注目されるのは、多数の木製品が出土したことである。寺地遺跡（４）、山岸遺跡（37）、竹花遺跡（17）の発掘調査事例によって明らかにされ、当遺跡からも同様に木製品が出土している［加藤ほか2008、加藤ほか2011a］。特に、箸状・棒状の製品が地面に突き立てられた状況で検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀が行われたことをうかがい知ることができる。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドと調査区の設定

2012年度調査区は、2008年度調査区（５区）の北側に隣接する。調査区は、矢板で囲まれた調査区を７区、土留めなしの調査区を８区と呼ぶこととした。

グリッドは2006・2008年度調査区と連続して設定することで、相互の位置関係を把握できるようにした。グリッドの主軸は、新幹線法線のセンター杭R2-4（世界測地系X=115906.5398、Y=-55596.2477、17Bグリッド北西隅）とR1-1（世界測地系X=115931.7057、Y=-55523.6880、10Bグリッド北側ライン上）を結んだラインとし、杭R2-4を基点とした（図版１）。主軸は真北から70度52分19秒東偏する。なお、2012年度調査区のうち30Aグリッド北西隅の座標はX＝115873.3891、Y＝-55722.3470、28Aグリッドの北西隅の座標はX=115879.9482、Y=-55703.451である。

グリッドは大小２種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを２m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。なお、当初計画になかったＡ列の北側に調査区が延びたため、Ｚ列を新たに設定した。小グリッドは１～25の算用数字で表し、北隅を１、東隅を５、西隅を21、南隅を25となるように付した。これを組み合わせて「30A1」等と表した。

2　基　本　層　序（図版２）

2012年度調査では、2008年度調査で付した層位との整合性を図ることに努めた。その結果、基本層序は2008年度調査と一致した。ただし、今回の調査では、旧地形の凹凸を検出することができ、低地部分でⅡｂ層を２枚に分層できた。旧地形は31列が高く、31・30列の境界付近で急激に落ち込み、ここから東側では平坦となる。なお、最も高い30列付近と、最も低い29列付近では30㎝の高低差がある。

０層　盛土　　宅地造成時の盛土

Ⅰ層　旧表土　　近代以降の出土品を含む。Ⅱａ層との層理面には鉄分が著しく沈着しており、水田の床土であったと考えられる。

Ⅱａ層　暗黄灰色細砂（2.5YR5/2）　　粒子がやや粗い細砂を基調とし、直径５㎜ほどの礫をまばらに含むことから、洪水性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、Ⅱａ層段階において水田稲作が行われていたことが明らかであり、水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。Ⅱａ層には17世紀前半を主体とし、18世紀前半までの遺物が含まれており、近世に堆積した土層と考えられる。層厚は４～８㎝ほどで、調査区西側の標高が高い部分には残存しない。

Ⅱｂ層　黒褐色細砂混じりシルト（10YR3/2）　　シルトを基調とし、砂を介在することから湿地性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、Ⅱｂ層段階においても水田稲作が行われていたことが明らかとなっており、水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。15～16世

紀の遺物を多数含むことから、主に中世後期に堆積した土層と考えられる。なお、最下位からは古代（9世紀）の遺物がわずかに出土しており、Ⅱｂ層の堆積開始年代を反映すると考えられる。また、一部でⅡｂ層を上下に二分することができた。上部はより砂質で、下部はより粘質である。層厚は10～30㎝ほどである。

Ⅲ層　褐灰色粘質シルト（10YR4/1）　Ⅱｂ層に比べてやや粘性が強い。直径10㎜以下の炭化物をわずかに含む。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅲ層は低地部分ほど厚く堆積しており、層厚は8～20㎝ほどである。

Ⅶ層　灰色砂質シルト（10YR2/1）　漸移層。Ⅷ層を基調とするものの、黒褐色粘質シルトを斑状に、炭化物粒子をごくわずかに含む。層厚は8㎝ほどで、低地部分のみで認められた。

Ⅷ層　灰色砂質シルト（5Y4/1）　調査において地山と判断した土層であり、上面が遺構検出面である。均質な砂質シルトで、混入物は認められない。

3　調 査 の 概 要

前節で触れたとおり、Ⅱａ層（近世）、Ⅱｂ層（中世後期）、Ⅲ層（弥生時代後期～古墳時代前期）の3枚の遺物包含層を層位的に調査した。

Ⅱｂ層では14世紀後半～16世紀の陶磁器類とともに、箸状木製品が地面に突き刺したような状態で検出したが、建物等の遺構は検出できなかった。

Ⅲ層では古墳時代前期を中心とする土器と石器が出土した。土器はほとんどが細片であり、全体を復元できる資料は存在しない。また、遺構の分布は極めて希薄であり、土坑1基、ピット（柱穴）4基のみであった。このほかに、ピット状の落ち込みを多数検出したが、樹根等により形成された落ち込みと判断した。ただし、表面上は遺構との区別ができないため、遺構と同様に調査して記録を残すこととした。

なお、遺構調査の方針･記載は『新潟県埋蔵文化財調査報告書第207集 姫御前遺跡Ⅱ･竹花遺跡Ⅰ』［加藤ほか2011a］、土層及び土器・陶磁器の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』（2003年度版）に準じることとした。

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

遺構名は、遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略号は、ピット＝P、土坑＝SK、性格不明遺構＝SXとした。SXとしたものは、倒木痕、樹根等である。また、2012年度調査においては、遺構番号を800番から付した。検出した遺構は、中世と古墳時代前期の２時期ある。

中世は、祭祀を想定させる箸状木製品を地面に突き立てたものを１基検出した。このような遺構は2006年度・2008年度調査でも多数検出した。

古墳時代前期は当遺跡の中心時期であり、遺物量は定量あるものの遺構数が希薄であった。ピットは17基検出したが、そのうち柱穴と推定できたものは４基のみであった。そのほかのピットは、平面・断面形状、埋土の特徴から樹根痕である可能性が高いと判断した。また、溝状遺構として検出した遺構についても、ピット同様に不整形な形状、覆土の特徴から樹根痕と判断した。人為的に掘り込まれたと判断した遺構は、ピット４基と土坑１基である。遺構の形状や規模等は観察表に記載した。

2　中 世 の 遺 構（図版３・４・10）

SX800は箸状木製品（報告番号88）が地面に突き刺さった状態で検出した。Ⅱｂ層上部を貫いているが、Ⅱｂ層下部の上面では箸が折れ曲がっていた。SX800のほかに、Ⅱｂ層中からは箸状木製品６点が出土したが、地面に突き刺さった状態のものはSX800のみであった。

3　古墳時代前期の遺構

A　土　　坑

SK819（図版３・４・10）

開渠で壊れているが、平面形態は方形または長方形を呈するとみられる。長軸は残存値で50㎝、短軸は78㎝である。深さは43㎝で断面形態は台形状を呈する。覆土は４層に分層した。主に地山土で埋め戻されている。１層から土師器の細片が２点出土した。

B　柱　　穴（図版３・４・10）

掘形がしっかりしており、比較的深く掘られているピットを柱穴として報告する。P806・P811・P821・P824である。これらの柱穴は、調査区西側の標高が比較的高い場所で検出した。覆土の色調が褐灰色や黒褐色であるため、地山との色調の差が明瞭で検出作業は容易であった。覆土はⅢ層を基調としたシルトで、炭化物がまばらに混入する。南側に隣接する2008年度調査区（５区）で検出したピットと合わせて、柱筋を確認したが、掘立柱建物を組むことはできなった。出土遺物については、P811から土師器の細片が１点出土したのみで、そのほかのピットからは遺物は出土しなかった。

C　倒　　木　　痕（図版２・３・４・10）

29Z5、29A1・2・6・7 グリッドで土坑状の SX825 を検出した。平面形態は不整楕円形を呈する。長径は残存値で 3.8m、短径は 2.1m である。断面形態は弧状を呈するが、中央部分が深くなっている。深度は浅いところで約 15㎝、最も深いところで 40㎝である。底面にはピット状の落ち込みも多数認められる。覆土の堆積状況に着目すると、平面プランの中央部には地山土を基調とした覆土が堆積し、その部分と地山との間にはⅢ層が帯状に観察された。断面でも土層の逆転現象が認められた。また、底面近くでは樹根の一部を検出した。このような覆土の変則的な堆積は、倒木痕の特徴［能登 1974］と共通する。SX825 は人為による遺構ではなく、倒木痕であると判断した。

D　樹　　根（図版３・４・９）

樹根は２か所で確認した。SX826 は 29Z・A グリッド、SX827 は 27Z・A、28Z・A グリッドに位置する。SX827 は樹芯部分が撹乱されていたものの、根が放射状に張っていた様子がうかがえる。これらの樹根はⅧ層中で根を張っており、その一部はⅢ層及びⅦ層掘削中に検出した。これらの樹根の樹種は、いずれもスギであった。また、樹根の枯死年代を調べるため、最外年輪から試料を採取して放射性炭素年代測定を行ったところ、39cal BC ～ 47cal AD 及び 342 ～ 115cal BC という結果が得られた。この年代は、弥生時代中期から後期頃及び弥生時代中期頃に相当する（第Ⅵ章）。姫御前遺跡 6 区流路で出土した多量の木材の枯死年代は、日本版較正曲線を用いたウィグルマッチングによっておよそ 70 ～ 100cal AD にまとまるという結果が出ている。両者では大きな年代差があるように思えるが、SX826 については δ 13C 補正した Libby Age で比較すると一致する試料もある。較正年代の相違は、利用した較正プログラムの相違によるものであり、SX826 の枯死年代は近似すると考えてよいであろう。ただし、このような条件を差し引いても SX827 の枯死年代は、古い値を示している。これら木材の枯死年代は、鬱蒼としたスギ林の開墾時期を反映するものと考えられる。

なお、Ⅷ層上面においては遺構とは覆土が異なり、より粘性の強い部分的な落ち込みを多数検出した。落ち込みに対しては断ち割り調査を行い、木の根を検出したこと、断面形が斜めに細く潜り込んでいること、落ち込みが不規則な放射状に分布することなどから、人為的な掘り込みではなく、樹木痕や倒木痕であると判断した。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

2012 年度調査区においては、Ⅱａ層から 17 世紀代、Ⅱｂ層から 15 ～ 16 世紀、Ⅲ層から弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺物が出土した。基本層序は、南側に隣接する 2008 年度調査区と対応し、出土遺物の年代も一致する。

Ⅱａ・Ⅱｂ層からは中近世の陶磁器類がコンテナ 3.5 箱（箱の内寸 :54cm × 34cm × 10cm）出土しており、その破片数はⅡａ層で 52 片、Ⅱｂ層で 311 片である。Ⅱｂ層の遺物については、これまでの報告［加藤ほか 2011a］に準じて産地・器種別の出土破片数を提示した（第１表）。陶磁器の種類は、2008 年度調査と同様にバラエティーに富み、14 ～ 17 世紀代の生活雑器のほか、茶道具や瓦器が含まれていた。当遺跡は、2008 年度調査における自然科学分析の結果から、中世以降は水田であったと想定できる［金原 2011］。しかし、出土遺物から付近に茶を嗜むことができる比較的財力のある階層が存在したことをうかがい知ることができた。また、祭祀関連遺物と考えられる箸状木製品（ほか木製品１箱）・銭貨（ほか金属製品０．５箱）・焼骨（5.3g）の存在も特徴的である。

弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、３箱出土した。土器は、Ⅲ層とⅧ層（地山）の境から出土するものが多い。それらは細片で、器形を復元できる土器は少ない。ほかに石器が１箱出土した。

2　土器・陶磁器

A　中世～近世の土器・陶磁器

中世から近世の土器・陶磁器の記述に当たっては、青磁は［上田 1982］、白磁は［森田 1982］、15 世紀代の青磁・白磁は［水澤 2004］、青花は［小野 1982］、瀬戸焼・美濃焼（以下、「瀬戸美濃」とする。）は［藤澤 2008・2009］、珠洲焼（以下、「珠洲」とする。）は［吉岡 1994］、瓦器は［水澤 1999・2009］、中世土師質土器は［水澤 2005］、肥前系陶磁器は［大橋 1989］、越中瀬戸焼（以下、「越中瀬戸」とする。）は［宮田 1997、相羽 2003］の分類・年代観を参考にした。

実年代については、瀬戸・美濃は古瀬戸後期様式Ⅰ期＝ 1360 ～ 80 年頃、Ⅱ期＝ 1380 ～ 1420 年頃、Ⅲ期＝ 1420 ～ 1440 年頃、Ⅳ期古段階＝ 1440 ～ 60 年頃、Ⅳ期新段階＝ 1460 ～ 80 年頃、大窯１段階＝ 1480 ～ 1530 年頃、大窯２段階＝ 1530 ～ 60 年頃、大窯３段階＝ 1560 ～ 90 年頃、大窯４段階＝ 1590 ～ 1610 年頃である。珠洲は吉岡Ⅱ期＝ 13 世紀前半、Ⅲ期＝ 13 世紀後半、Ⅳ期＝ 14 世紀第１四半期～第３四半期、Ⅴ期＝ 14 世紀第４四半期～ 15 世紀前半、Ⅵ期＝ 15 世紀後半である。肥前系陶磁器は大橋Ⅰ－１期＝ 1580 年代～ 1594 年、Ⅰ－２期＝ 1594 年～ 1610 年代、Ⅱ－１期＝ 1610 年～ 1630 年代、Ⅱ－２期＝ 1630 年～ 1650 年代、Ⅲ期＝ 1650 年代～ 1690 年代である。それ以外の年代については文中に示した。

時期	分類	器種 産地	供膳具						調理具	貯蔵具			その他								不明	合計 (破片数)
			天目	椀	皿	杯	盤	鉢	擂鉢 (片口鉢)	甕	壺	瓶	香炉類	茶入	蓋	灯明皿	火入	風炉 火鉢	匣鉢	転用		
中世	磁器	青花			1																	1
		青磁		8	5		1														4	18
		白磁		1	2	1																4
		青白磁																				0
	陶器	舶載天目																				0
		李朝陶器																				0
		瀬戸美濃	8	5	8			1				2									2	26
		珠洲							38	ロクロ（R種）15 タタキ（T種）91											6	150
		越前								3												3
		信楽									1											1
	土器	瓦器																2				2
		土師質			91																	91
近世	磁器	肥前系		1																		1
	陶器	肥前系		3	2				1												1	7
		越中瀬戸							1		1											2
		瀬戸美濃			2																2	4
		京・信楽																				0
		備前																				0
		萩																				0
不明																					1	1
合計			8	18	111	1	1	1	40	111		2	0	0	0	0	0	2	0	0	16	311

第１表　中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数（姫御前Ⅲ － Ⅱｂ層）

１）椀　　類（図版５・11 － １～12）

１～３は瀬戸美濃の天目茶椀である。１・２の釉薬は黒味を帯びた褐色であるのに対し、３は明るい黄色味を帯びた褐色を呈する。釉薬の色調が時期を決める判断基準のひとつとなる。１は古瀬戸後期様式Ⅲ期、２は古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階、３は大窯第４段階に比定される。

４～７は龍泉窯系青磁である。４は釉薬を厚く掛ける端反椀で、上田分類のＤ－Ⅱ類、水澤分類の厚釉端反椀である。製作年代は1430年代から15世紀代である。５にも釉薬が厚くかけられていることから、水澤分類の厚釉端反椀と考えられる。高台の施釉に着目すると、高台内面の途中まで釉がかかるが、底外面の釉薬は削り取ったとみられる。上田分類のＤ－Ⅱ－ｂ類の可能性がある。６の口縁部外面には雷文帯が施されるもので、上田分類のＣ－Ⅱ類、水澤分類の直縁雷文帯椀である。７は外面に箆描蓮弁文が施されるもので、上田分類のＢ－Ⅳ類、水澤分類の直線箆描蓮弁文椀である。

８は白磁である。内面の見込み近くには沈線が一条巡る。釉調はやや青味を帯びた灰色を呈する。森田Ｃ群に属する端反椀と考えられる。

９･10は越中瀬戸である。９は丸椀で内外面に鉄釉が施されるものの、底部付近には施釉されていない。高台は削り出し高台で、砂粒の動きからロクロの回転方向は右回転である。10は天目茶碗で、内外面に鉄釉が施されている。９・10ともに17世紀代の所産である。

11は肥前系磁器である。器形は丸椀で、外面には染付が施される。大橋Ⅱ期に比定される。

12は肥前系陶器である。器形は筒形で、外面には鉄絵が施される。器面及び胎土に細かな黒色の吹き出しが認められる。大橋Ⅱ期に比定される。

２）皿　　類（図版５・11 － 13～30）

13～15は龍泉窯系青磁である。13・14は稜花皿である。13の外面には蓮弁文、口縁内側には櫛描波状文が施される。15は口縁部が欠損しているため、器種を特定できないが、水澤分類の腰折端反皿、または稜花皿と考えられる。これらは15世紀末から16世紀前半の所産である。

16 ～ 18 は白磁である。16 は八角杯である。釉調はやや黄色味を帯びた白色である。15 世紀末から 16 世紀前半の所産である。17 は内湾皿である。釉調はやや黄色味を帯びた白色である。15 世紀代の所産である。18 は抉高台全面施釉皿であり、15 世紀前半の所産である。16 ～ 18 は森田Ｄ群に属する。

19 は青花で、小野分類の染付皿Ｃ群である。15 世紀後半から 16 世紀前半の所産である。

20 ～ 22 は瀬戸美濃の縁釉小皿である。20 の釉調はにぶい黄色味を帯びた緑色に対し、21 は透明感の強い緑色を呈する。20 は古瀬戸後期様式Ⅳ期、21 は大窯第１段階に比定できる。22 は 21 に釉調が似るころから、大窯第１段階に比定できると考えられる。

成形技法	分類	口径
手づくね成形	１類	８㎝前後
	２類	９～ 10㎝前後
	３類	10 ～ 11㎝前後（浅身）
	４類	10 ～ 11㎝前後（深身）
	５類	14 ～ 16㎝前後
	６類	19㎝前後
ロクロ成形	１類	6.5㎝前後
	２類	７～ 10㎝前後
	３類	11㎝前後
	４類	13 ～ 17㎝前後

第２表　中世土師質土器皿の分類

［相羽 2011］より

23 ～ 29 は土師質土器の皿で、いわゆる「かわらけ」である。土師質土器皿の分類については『姫御前遺跡Ⅱ』の分類［相羽 2011］を参考にした（第２表）。2008 年度調査と同様に、「ロクロ成形」と「手づくね成形」に二分される。23 ～ 25 はロクロ成形の土師質土器皿である。23 は２類、24 は３類に属する。24 の口縁端部にはススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。25 の底部には回転糸切り技法によって切り離された痕跡がわずかに残っている。26 ～ 29 は手づくね成形の土師質土器皿である。26・27 は２類、28・29 は５類に属する。29 は非常に薄手の器壁で、口縁部が大きく開く特徴から、15 世紀代の京都系土師質土器である。27 には光沢があるススの付着が認められ、灯明として使用されたと考えられる。

３）水注・盤・鉢・瓦器（図版５・11 － 31 ～ 36）

31 は瀬戸美濃である。器形の上部が残存していないため器種を断定することは難しいが、内面には明瞭なロクロ目が残ることから袋物と考え、底径（5.8㎝）の大きさから水注と判断した。わずかに残る底部外面には、回転糸切り痕が残る。内外面には緑釉が施されている。

32 は青磁の盤である。細片であるため、『姫御前遺跡Ⅱ』の青磁盤（図版 36 －報告番号 75）を参考に図化した。内面には幅広の蓮弁紋が施されている。釉調は透明感の強い緑色を呈し、釉薬は比較的厚く掛けられている。

33 は瀬戸美濃の椀形鉢である。外面の下半はロクロ削りで整えられている。古瀬戸後期様式Ⅱ期からⅢ期に比定できる。

34 は肥前系磁器の鉢である。内面には染付が施されている。大橋Ⅱ－２期に比定できる。

35・36 は瓦器である。35 は風炉と考えられる。外面の色調はにぶい橙色を呈する。外面には突帯が一条巡り、器面は丁寧にミガキが施されている。36 は体部が内湾する風炉Ⅱ類［水澤 2009］と考えられる。器壁が非常に厚く、外面の色調は橙色を呈する。外面はスタンプ文で装飾され、二条の突帯の間に「×入重画紋」［水澤 2009］が、その文様帯の上位に蓮弁文が連続的に巡る。

４）甕　　類（図版５・11 － 37 ～ 40）

37 ～ 40 は珠洲の甕である。37･38 は口縁形態から、37 は吉岡Ⅳ－２期、38 は吉岡Ⅴ期に比定される。39 は体部片、40 は底部片である。

5）壺　　類（図版６・12 － 41 ～ 44）

41 は珠洲の壺Ｒ種である。器面に残る砂粒の動きから、ロクロの回転方向は右方向である。底部外面には静止糸切り痕が残る。

42 ～ 44 は越中瀬戸である。42･43 は広口壺である。42 は口縁部が直立する相羽分類のＤ類である。43 は口縁端部が肥厚し、わずかに外反する相羽分類のＢ類である。42･43 ともに口縁端部が摩耗している。44 は底径の大きさ、立ち上がりの角度から、広口壺の底部と判断した。底部外面には回転糸切り痕が残る。内外面に鉄釉が施される。

6）片口鉢・擂鉢類（図版６・12 － 45 ～ 51）

45 ～ 50 は珠洲である。45・47 ～ 49 は口縁端部に波状文を有する。口縁部の形態から吉岡Ⅴ期に比定される。51 は越中瀬戸である。17 世紀代の所産である。

7）加　工　円　盤（図版６・12 － 52 ～ 54）

52 ～ 54 は土器・陶磁器の破片を素材とする加工円盤である。側縁に連続的な剥離を施し、平面形を略円形に仕上げられるものである。加工円盤の分類は、［相羽ほか 2011］を参考にした（第３表）。加工円盤は７点出土し、素材別に分けると、珠洲が６点、肥前系陶器が１点である。珠洲を素材とするものはすべて１類に分類され、そのうち２点を図示した。52・53 は叩き成形の甕が用いられている。52 の直径は 2.4㎝、53 は直径 2.9㎝である。54 は肥前系の皿が用いられている。内面には蛇の目釉剥ぎの痕跡が残る。大橋編年Ⅲ期からⅣ期に比定される。直径は推定 7.6㎝で、４ｂ類に分類される。なお、2012 年度出土分を含めた姫御前遺跡の加工円盤集計表は第４表である。

直径	高台	分類
22 ～ 29㎜	-	１類
31 ～ 39㎜	無	2a 類
	有	2b 類
44 ～ 58㎜	無	3a 類
	有	3b 類
61㎜～	無	4a 類
	有	4b 類

第３表　加工円盤の分類

［相羽ほか 2011］より

分類	素材												合計
	珠洲	越前	白磁	青磁	青白磁	青花	李朝陶器	瀬戸美濃	越中瀬戸	肥前系陶器	京焼	土師器	
１類	**27**	6										1	**34**
2a 類	6	1		1	1				1				10
2b 類											1		1
3a 類								1				7	8
3b 類			1	1		1		7					10
4a 類	1							1					2
4b 類				1			1		1	**4**			**7**
合計	**34**	7	1	3	1	1	1	9	2	**4**	1	8	**72**

第４表　姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表

（［相羽ほか 2011］に一部加筆。変更した数値はゴシックで表記。）

8）土　　錘（図版６・12 － 55・56）

管状土錘は３点出土し、そのうち２点を図化した。55 は残存長で 3.1㎝、外径は推定で 4.1㎝である。外面は摩耗し、調整痕は不明瞭である。56 は残存長で 6.6㎝、外径は推定で 5.0㎝である。外面には手で握って成形した指頭圧痕が残る。55 はⅡｂ層、56 はⅢ層から出土した。同様の土錘は、2006 年度・2008

年度調査においても定量出土しており、そのほとんどがⅡａ・Ⅱｂ層から出土している。このような状況を鑑みれば、2012 年度調査で出土した土錘についても中世から近世初頭の所産と考えられる。

B　古代の土器（図版６・12 － 57）

古代の土器は須恵器が２点出土し、そのうち１点を図化した。57 は須恵器の無台杯である。胎土はやや粗く、石英、白色粒子、海綿骨針が混入する。産地は不明であるが、胎土の特徴は青海地区の西角地窯産の須恵器と類似する。時期は［春日 1998］のⅡ期に比定され、８世紀末～９世紀初頭に位置づけられる。出土層位はⅡｂ層の下位であり、このような須恵器の出土状況は 2008 年度調査と同様の傾向を示す。また、細片のため図化しなかったが、胎土の特徴から佐渡小泊産と考えられるものも１点出土した。

C　弥生時代～古墳時代の土器

１）土器の分類

弥生時代から古墳時代の土器の分類は、滝沢規朗氏の分類［滝沢 2005］に基づくこととした。同一基準よる観察の蓄積が重要と判断したことから、分類名称は本報告で独自に付さず、滝沢分類を踏襲することとした。器種は甕・壺・高坏・器台があるが、分類できたものは甕や壺の一部に限られる。なお、年代観については、2008 年度調査と同様に弥生時代後期から古墳時代前期に比定される。

２）各　　説（図版６・12 － 58 ～ 74）

58 ～ 61 は甕である。58 は有段口縁無文壺で、甕Ｂ類である。59 は口縁端部が丁寧に面取りされていることから甕Ｃ２類である。60・61 は口縁端部が面取りされずにナデおよび横方向のハケで整えられることから甕Ｃ３類である。

62 ～ 66 は壺である。62 は壺Ｌ類である。細口の有段口縁を呈し、口縁部下段が短い。口縁部内面には横方向のハケが施される。63 は細口の有段口縁部分で、口縁部下段が短いことから壺Ｌ類の可能性が考えられる。64 の口縁部には帯状の粘土紐を貼り付け、一段厚く作り出している。65 は細口壺の頸部である。66 は壺の底部である。

67 は高坏または器台の口縁部である。内外面は横方向のミガキで丁寧に整えられ、赤彩されている。

68 ～ 71 は高杯の脚部である。

72・73 は器台または高杯の裾部である。73 の内外面は横方向のミガキで丁寧に整えられ、赤彩されている。

74 は土錘である。形状は直径４㎝程度の球形を呈する。軸棒に粘土を巻き付け、表面を撫でることで整形している。全体に摩耗しており、調整痕は不明瞭であるが、わずかに指頭圧痕が認められる。胎土には石英、長石、砂礫が含まれ、やや粗い。焼成は良好で、色調は黄灰色である。Ⅲ層から出土したこと、弥生時代後期から古墳時代前期の土器と胎土が共通することから、中世の土錘とは区別した。

3　石器・石製品（図版７・13 － 75 ～ 80）

背面に円礫面を有する剥片を素材とする石器が４点出土した。2006・2008 年度調査で出土した資料と合計すると 86 点となる。これらは、糸魚川地域で 1986 年から「貝殻状剥片」と呼ばれており［小池 1986］、その技術的･形態的特徴については『姫御前遺跡Ⅱ』において分析している［加藤ほか 2011a］。なお、一般的な「貝殻状剥片（concoidal flake）」とはニュアンスが異なるので注意する必要がある。75 は貝殻状剥片である。打点付近に細かな剥離痕が重なることから、著しく凹むことが特徴的であるバルブは未発達で比較的平坦であり、末端部分では階段状剥離をなしている。これらの特徴は、ここでいう貝殻状剥片の特徴をよく表わしている。石材は安山岩である。76 は横刃形石器である。75 で見られたのと同様の特徴を有する貝殻状剥片を素材としており、末端部分に微細剥離痕を連続的に施される。石材はひん岩である。

77･78 は貝殻状剥片の石核である。石材は、77 は安山岩、78 は流紋岩である。このほかにもう１点、流紋岩製の貝殻状剥片石核が出土した。78 は扁平な円礫の端部を打点として剥片を剥離しているが、貝殻状剥片と対応するように、打点付近では細かな剥離痕が重なって凹んでいる。一方、77 は剥片を剥離できていないが、円礫の端部を執拗に敲打している様子が見て取れる。この過程を経て、潜在的な割れを発生させ、剥片を剥離したと考えられる。なお、いずれも主要な剥離面と相対する位置に敲打痕のような凹み（77）や剥離面（78）が観察される。両側から挟みこむように加撃した可能性が想定される。

79 は敲石である。石材は砂岩である。長楕円礫の上下両端に敲打痕が形成される敲石は、弥生時代後期から古墳時代前期に特徴的に認められる。特に、糸魚川市から上越市付近に、その遺跡が集中する傾向にある。目的は定かでないが、地域・時期を特定し得る指標的な形態といえるかもしれない。

4　金属製品・鍛冶関連遺物（図版７・13 － 81 ～ 87）

金属製品には銭貨があり、調査区全域から鍛冶関連遺物が出土した。すべてⅡａ・Ⅱｂ層から出土しており、中世から近世の遺物と判断した。

81 ～ 85 は銭貨である。銭貨６点出土し、そのうち銭種のわかる資料５点を図示した。すべて北宋銭で、初鋳年の古いものから天聖元寶（1023 年初鋳）、嘉祐通寶（1056 年初鋳）、熙寧元寶（1068 年初鋳）、政和通寶（1111 年初鋳）である。北宋銭が多く出土した点については、これまでの調査成果と同様の傾向を示す（第５表）。

	新・後漢銭	唐銭	五代十国	北宋銭	南宋銭	元銭	明銭	不明・無文銭	合計
姫御前遺跡Ⅰ	0	0	0	8	1	0	4	0	13
姫御前遺跡Ⅱ	0	4	0	37	2	0	3	6	52
姫御前遺跡Ⅲ	0	0	0	5	0	0	0	1	6
竹花遺跡Ⅰ	0	3	1	31	2	1	3	8	49
竹花遺跡Ⅱ	2	4	0	14	1	0	3	4	28
合計	2	11	1	95	6	1	13	19	148

第５表　各遺跡における出土銭貨数量表　（単位：枚）

鍛冶関連遺物は羽口と鉄滓が出土した。羽口は２点出土し、そのうち１点を図化した（86）。推定される外径は 8.6㎝、内径は 2.1㎝ほどである。炉に接する部分に相当するようで、残存する端部には黒色ガラス質の付着物が帯状に認められる。鉄滓は 16 点、730g が出土し、すべて磁着することから含鉄滓と

判断した。うち残存状況が良好な椀形滓１点を図化した（87）。表面には炭化材の付着が見られる。

Ⅱａ層から出土したものは１点で、そのほかはⅡｂ層からの出土である。第９図は姫御前遺跡から出土した鉄滓と羽口の出土分布図である。37B グリッドを中心とする範囲のほかに、29A グリッド周辺からも鉄滓が多く出土する傾向がある。29A グリッド周辺は 2012 年度調査範囲に当たるが、鍛冶に関連する遺構は検出されていない。

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	
									（2012 年度調査区）		1 132 1											Z
2 19	2 192	8 296 4	9 492 5	12 238 2	7 238 1	1 38			**1** **26**	**10** **484**	**8** **540**	**3** **58**	**5** **69** **1**	5 81 1	1 6	3 87		2 24			2 21	A
	5 160 1	10 453 6	36 1162 14	23 603 1	18 613	1 168 1		4 39	3 158	10 343 2	12 374	1 18	3 39	14 389	4 273 2	1 5	3 153	1 54		1 9 1	1	B
		1 144	4 40 2	4 200 2											2					1 30		C

（上段 : 鉄滓の個数、中段 : 鉄滓の重量 (g)、下段 : 羽口の個数、変更した数値はゴシックで表記。）

（［加藤ほか 2011a］に、一部加筆・修正）

第９図　鉄滓・羽口出土分布図

5　木　製　品（図版７・13 － 88・89）

箸状木製品はⅡｂ層から６点出土し、そのうち遺存状態が良好な２点を図化した。88 は長さ 236㎜、幅６㎜である。断面多角形に表面を面取りしているが、両端は鋭利に尖がっていない。88 は地面に突き立てた状況で出土した（図版 10）。89 は欠損しているため全容は不明であるが、一方は尖らせている。おそらくは両口箸の一端であろう。

第Ⅵ章　自然科学分析

株式会社加速器分析研究所

1　姫御前遺跡出土木材の樹種

A　は　じ　め　に

姫御前遺跡は、海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積地に位置する。本報告では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から出土した、樹根と考えられる木材について樹種同定を実施する。

B　試　　料

試料は、SX826 と SX827 から出土した樹根 2 点（木材サンプル 1・2）である。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定を実施した。

C　分　析　方　法

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東［1982］や Richter ほか［2006］を参考にする。

D　結　　果

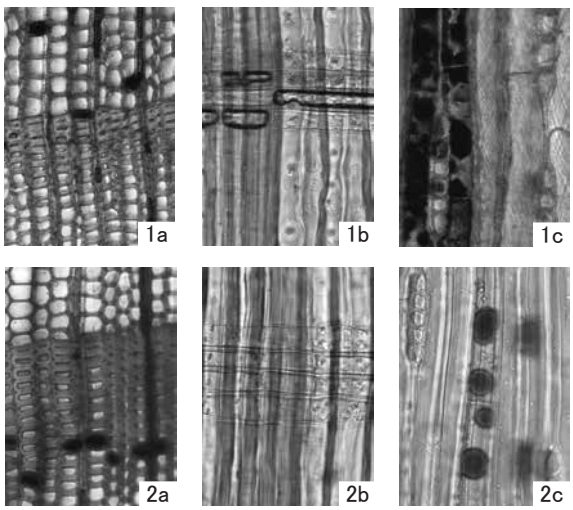
木材は 2 点とも針葉樹のスギに同定された（第 6 表・第 10 図）。スギの解剖学的特徴等を記す。

・ス ギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 3-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

遺構	試料名	種類
SX826　Ⅲ層	木材サンプル 1	スギ
SX827　Ⅲ層	木材サンプル 2	スギ

第 6 表　樹種同定結果



1.スギ(SX826;木材サンプル1)　100 μ m:a
2.スギ(SX827;木材サンプル2)　100 μ m:b,c
a:木口，b:柾目，c:板目

第 10 図　木材の顕微鏡写真

E　考　　察

SX826 と SX827 から出土した樹根は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から出土しており、いずれも針葉樹のスギに同定された。放射性炭素年代測定の結果、木材サンプル１は弥生時代中期から後期頃、木材サンプル２は弥生時代中期頃に相当する年代値が示され、その時期の本地点にスギが生育していたことが推定される。スギは、現在の日本海側では扇状地扇端部の涌水地周辺や谷筋等の適湿地に生育している。当遺跡は、姫川と海川によって形成された三角洲に位置しており、その形成過程は扇状地に似るとされている。スギは、扇端部の遊水地周辺に生育していたことが推定される。
当遺跡及び隣接する竹花遺跡では、弥生時代から古墳時代前期とされる自然木、及び縄文時代晩期、弥生時代かとされる自然木について樹種同定が実施されている［箱崎ほか 2011］。その結果をみると、弥生時代かとされる自然木と弥生時代から古墳時代前期の自然木ではスギが優占し、縄文時代晩期かとされる自然木２点もスギである。今回の結果は、これまでの調査結果とも調和的である。

引用文献

箱崎真隆・小川とみ・鈴木三男　2011 「新潟県姫御前遺跡及び竹花遺跡出土木材の樹種」『姫御前遺跡 II・竹花遺跡 I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　130-142p

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 『針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修） 海青社　70p
［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］

島地　謙・伊東　隆夫　1982 『図説木材組織』地球社　176p

２　姫御前遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

A　測定対象試料

姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町２丁目 1069-1 ほか（北緯 37° 02′ 33″、東経 137° 52′ 24″）に所在し、海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積地に立地する。測定対象試料は、SX826 出土木片（木材サンプル１：IAAA-121380）、SX827 出土木片（木材サンプル２：IAAA-121381）の合計２点である（第７表）。試料はいずれも年輪最外部より採取した。これらは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層下から検出した樹根の一部である。なお、同一試料の樹種同定が実施されている。

B　測 定 の 意 義

過去２回の発掘調査により、周辺地域の開墾年代（実年代）が、年輪年代測定及び放射性炭素年代測定とのウィグルマッチングによって明らかになっている。今回の調査で検出した樹根の年代を測定することで、過去の結果を検証する。

C　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸 - アルカリ - 酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第７表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D　測　定　方　法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算　出　方　法

（１）δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第７表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する［Stuiver and Polach 1977］。^{14}C 年代はδ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第７表に、補正していない値を参考値として第８表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第７表に、補正していない値を参考値として第８表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース［Reimer et al. 2009］を用い、OxCalv4.1 較正プログラム［Bronk Ramsey 2009］を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに

参考値として第８表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

F　測　定　結　果

試料の ^{14}C 年代は、SX826 出土の木材サンプル１が 2000 ± 30yrBP、SX827 出土の木材サンプル２が 2140 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、木材サンプル１が 39cal BC ～ 47cal AD、木材サンプル２が 342 ～ 115cal BC の間に各々複数の範囲で示される。木材サンプル１が弥生時代中期から後期頃、木材サンプル２が弥生時代中期頃に相当し［小林 2009］、上位の遺物包含層の時期と矛盾しない。

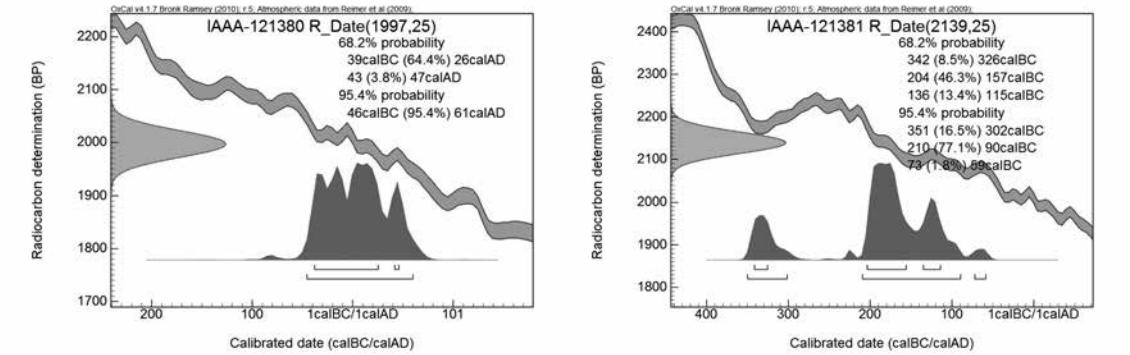
試料の炭素含有率はいずれも 50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-121380	木材サンプル１	SX826　Ⅲ層	木片	AAA	-25.62　±　0.49	2,000　±　30	77.98　±　0.25
IAAA-121381	木材サンプル２	SX827　Ⅲ層	木片	AAA	-25.44　±　0.41	2,140　±　30	76.61　±　0.24

第７表　測定結果（補正値）　[#5319]

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)			
IAAA-121380	2,010　±　20	77.88　±　0.23	1,997　±　25	39calBC - 26calAD (64.4%) 43calAD - 47calAD (3.8%)	46calBC - 61calAD (95.4%)
IAAA-121381	2,150　±　20	76.54　±　0.23	2,139　±　25	342calBC - 326calBC (8.5%) 204calBC - 157calBC (46.3%) 136calBC - 115calBC (13.4%)	351calBC - 302calBC (16.5%) 210calBC - 90calBC (77.1%) 73calBC - 59calBC (1.8%)

第８表　測定結果（非補正値）　[参考値]



第 11 図　暦年較正年代グラフ

引用文献

Bronk Ramsey C. 2009　Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一　2009　「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣　55-82p

Reimer, P.J. et al. 2009　IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977　Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第Ⅶ章　ま　と　め

姫御前遺跡の発掘調査は、今回で３回目となる。合計で 7,027㎡を調査したうち、本書に関わる調査は 227㎡に過ぎない。加えて、前回調査の報告書において、様々な観点から総括しており、ここで新たな所見を提示することは難しい。ここでは３回にわたって実施した調査成果を要約して、まとめにかえたい。

1　旧地形の復元

姫御前遺跡は、丘陵裾と海岸砂丘に挟まれた沖積地（三角州）に立地する。遺跡周辺は、洪水堆積や宅地造成を経た現在でこそ平坦であるが、かつては起伏に富んだ地形にあったことが分かった（図版 1）。総延長 400m に及ぶ調査範囲内のうち 19 ～ 23 列周辺が最も高く、遺構検出面（Ⅷ層上面）の標高は 4.5m ほどで、西側に向かって地形が緩やかに落ち込んでいた。西端の 38 ～ 40 列では 3.8m ほどであり、遺跡内でも明瞭な高低差がある。このうち、弥生時代後期～古墳時代前期に集落が築かれたのは、標高が最も高い 19 ～ 23 列周辺に当たる。また、西側は標高が徐々に下がっていき、水田が築かれた竹花遺跡の標高は 3 ～ 1.5m ほど（東側が高く、西側が低い。）となる。居住域が築かれた範囲と 1.5 ～ 3m ほどの高低差があり、この地形が土地利用に反映されたと考えられる。

起伏は西方向だけでなく、南北への落ち込みも検出した。15 ～ 17 列では、南北に向かって落ち込む様子が観察され、痩せ尾根状の高まりに若干の遺構が存在した。今回の調査では、27 ～ 29 列周辺でも同様の状況にあることが分かった。北側には、海岸砂丘の後背湿地が広がっていた可能性が高く、その縁辺部を検出したと考えられる。一方、山側に相当する南側が落ち込むことは少々、意外であった。南側の落ち込みは、15 ～ 17・27 ～ 29 列で認められたほか、24・25 列においては切土によって成形した岸辺 SR202 を検出した。SR202 は舟着場の可能性があり、舟が往来できる流路などの滞水域が存在したことを示唆する。

このように、南北両側を滞水域に挟まれた痩せ尾根状の高まりに集落が築かれたといえる。何故に、このような立地条件を選択したのか、あるいは選択せざるを得なかったのか、今後、周辺地域の調査においては十分留意すべきである。

また、31 ～ 39 列では遺跡を東西に分断するように流路を検出した。弥生時代後期～古墳時代前期においてはこの流路を境に、東側に居住域、西側に水田域が広がっていた可能性が高い。この流路は、位置関係からかつての蓮台寺川であると推定される。31 ～ 34 列付近で流れを西側に大きく変えて城ノ川と合流し、日本海に注いでいたと見られる。この川は、途中、海岸砂丘列を横断するため、降雨量が多い時や波の高い時は、川の水がスムーズに海に流出しなかったようである。

寛政４（1792）年９月の大雨では、「海から高波が城の川へ打ちこみ、砂が溜まって川水が流れなくなった。おまけに大雨とあって、江筋の水が流れこみ、城の川橋の上まで、水が上がってしまった。」という。そして、町裏（竹花遺跡・姫御前遺跡周辺）が水たまりになった状況が、『町年寄　御用留帳』に次のように記されている［青木 1979］。

「やがて水溜りは、善導寺辺より、南一の宮　森下、東は押上　裏まで水たまりこれあり候。湖水渺々にて、

囲ひ材木、わらにお　等、残らず流れ、田んぼの間に浮き申し候て、追々、筏に乗じ候て、主々ども取り入れ申し候通り、珍しき大変にござ候。」

この文献からは、竹花遺跡・姫御前遺跡が立地する丘陵縁と砂丘間の沖積地一面が水没したことが分かる。城ノ川・蓮台寺川は、上流部は急勾配であるが、沖積地に入ると勾配が緩やかで、かつ海岸に達する直前には砂丘列を横断する。このような環境にあることから、洪水を起こしやすい河川と考えられ、砂丘裏の沖積地が水没しやすかったと考えられる。

2　弥生時代後期

糸魚川平野においては縄文時代晩期以降、鬱蒼としたスギ林が広がっていたことが自然科学分析によって明らかになっている［加藤ほか 2011a］。このスギ林の開墾年代が弥生時代後期（新潟シンポ編年 1・2 期、第 9 表）、実年代で言うと AD70 ～ 100 年頃に相当することが、2008 年度調査によって明らかになった。今回の調査においても、検出した樹根の枯死年代を調べるため放射性炭素年代測定を行ったところ、2008 年調査に近似する結果が得られた。しかし、弥生時代中期に遡る試料も見られたことから、開墾の開始年代が更に遡る可能性がある。いずれにしても、この頃にスギ林が伐採され、平野部の開発が本格化したことを具体的に裏付けられたことは重要な成果といえる。花粉分析・植物珪酸体分析によれば、これ以降、スギ林が減少していき、これと相反するように水田が広がっていくことが明らかとなっている。糸魚川地域の環境変遷においては、重大な画期であったといえよう。なお、開墾されたと推定される年代は、糸魚川地域における弥生時代後期～古墳時代前期の中核的な集落・笛吹田遺跡の開始年代と合致する。笛吹田遺跡は、平野部を開墾する上で重要な役割を果たしたと考えることができよう。

時代		実年代	滝沢 2005	川村 2000	田嶋 1986・1988	北陸（南西部）型式・様式	田辺 1981	姫御前
弥生時代						専光寺～戸水 B		
	後期	AD0（^{14}C） AD100（^{14}C）	1 期		漆町 1 群	猫橋		Ⅰ期
			2 期		漆町 2 群	法仏		
		AD169（年輪）	3 期		漆町 3 群	月影		
	終末期		4 期		漆町 4 群			
			5 期	1 段階	漆町 5 群	白江		Ⅱ期
		AD258（年輪）	6 期	2 段階	漆町 6 群			Ⅲ期
	前期		7 期	3 段階	漆町 7 群	古府クルビ		
			8 期	4 段階	漆町 8 群			
			9 期	5 段階	漆町 9 群	高畠		Ⅳ期
			10 期	6 段階	漆町 10 群			
古墳時代				7 段階	漆町 11 群			
	中期	AD400		8 段階	漆町 12 群			Ⅴ期
				9 段階	漆町 13 群		TK73	
							TK216	
				10 段階			ON46	
							TK208	
				11 段階			TK23	
	後期			12 段階	漆町 14 群		TK47	Ⅵ期
		AD500		13 段階	漆町 15 群		MT15	
				14 段階			TK10	
				15 段階			MT85	
				16 段階			TK43	

※ AD169（年輪）は大友西 SE18、AD258（年輪）は、二口かみあれた SX208 による。

第 9 表　弥生時代～古墳時代の編年と実年代（［春日 2008、滝沢 2010］をもとに作成）

3　弥生時代終末期～古墳時代前期

弥生時代後期（新潟シンポ編年１・２期）にスギ林の開墾が本格化した後、弥生時代終末期（新潟シンポ編年５期頃）になると平野部に集落が築かれ始める。新潟シンポ編年５期頃に築かれたと見られる SI216 は、1 辺 7m の規模をもつ平地建物で、周囲を周溝が廻っている。規模の大きさや構造を考慮すれば、集落内における中核的な建物であったと考えられる。この建物が構築されたのと時期を同じくして、竹花遺跡で最も古い水田が耕作され始める。同時期（新潟シンポ編年５期）の遺構の標高を比較すると、姫御前遺跡の平地建物 SI216 が 4.5m、竹花遺跡の水田畦畔 SX119 が 1.8m であり、両者では 2.7m もの標高差がある。この標高差を利用して、土地利用を区分していたことは明白である。また、同時期に築かれた笛吹田遺跡や南押上遺跡と比べると、遺物量（土器・玉作関連資料）が少なく、集落の規模も小さい印象を受ける。したがって、周辺地域においては中核的な集落ではなかったと考えられる。

また、新潟シンポ編年５期以降、６期以前には火山灰が降灰していることが分かった。火山灰の下位からは５期、上位からは６期の遺物が層位的に出土したことから、降灰時期を具体的に絞り込むことができた。この火山灰の給源は明らかでないが、粗粒の軽石を含むことや、火山ガラスの付着した角閃石が伴うことから、比較的近傍にあったことが想定される。近傍の活火山は焼山があるが、該期の活動は知られていない。

姫御前遺跡で検出した火山灰は、新潟市北区正尺Ｃ遺跡において検出した給源不明の古墳時代前期の火山灰［卜部・高濱 2001］と化学組成が良く似ることも分かった。しかし、化学組成領域に若干の相違が認められ、姫御前遺跡と同じ組成領域を持つ山岸遺跡・上越市下割遺跡と、正尺Ｃ遺跡と同じ組成領域を持つ正尺Ａ遺跡・山岸遺跡・上越市吹上遺跡とに分けることができた。両者では噴出年代も若干異なる。姫御前遺跡の火山灰の降灰年代は５～６期に位置付けることができる一方、正尺Ｃ遺跡の火山灰の降灰年代は７～８期に位置付けられる。しかし、全体的には化学組成領域は近似しており、同一起源の一連の活動によって噴出した火山灰である可能性が高い。給源が定かでないものの、今後、新潟県域においては指標火山灰として活用することができよう。

この火山活動によって、糸魚川地域に如何ほどの影響が生じたのであろうか。二次堆積物とは言え、窪地でピュアな状態で残存していたことから、相当量の火山灰が降灰したと想定される。花粉分析では、火山灰の二次堆積物層であるⅢｃ層でスギ林･クリ林が減少し、二次林が一時的に増加したとされた。そして、その後に堆積したⅢｂ層では、スギ林・クリ林が再び増加し、森林が回復したとされた。Ⅲｃ層におけるスギ林・クリ林の減少要因を、火山活動に求められる可能性がある。そして、火山活動が一段落すると共に、スギ林・クリ林が回復したと考えられよう。このように、火山活動によって植生に変化が生じた可能性がある。

4　古墳時代中期初頭

姫御前遺跡から竹花遺跡にかけての低地部では、草本質泥炭（姫御前遺跡Ⅳ上層・竹花遺跡Ⅳ１層）の堆積が確認された。極めて特徴的な土層であるため、遺跡間･調査区間を対比する上での重要な指標とした。この特徴的な層位は、新潟シンポ編年 11 ～ 12 期に位置付けられる竹花遺跡の畦畔 SX33 を覆っており、

その堆積時期は古墳時代中期初頭以降と考えられる。

草本質泥炭はアシの腐植からなり、一面が常時、水を湛える湿地帯に変貌したことを象徴する堆積物といえる。このような環境変化は、河川の流れが大きく変化したことに伴い、川の水が海へ流出しにくい環境になったことを反映する。例えば、流路の蛇行化・網目状化・狭小化や、河口の閉塞等を想定することができる。いずれも、多量の土砂が上流部から押し流されることによって、これらの状況が引き起こされると考えられる。上流部で何らかの自然災害が発生し、土砂を下流部に供給したと考えられよう。

草本質泥炭の堆積と共に、標高の低い竹花遺跡は水没し、一面に広がっていた水田は一時的に放棄されたと見られる。竹花遺跡では、弥生時代終末期～近世に至るまで、連続的に水田耕作が行われたことが植物珪酸体分析から明らかになっているが、草本質泥炭が堆積した時期のみ、イネの植物珪酸体が激減する。急激な環境変化に対応できず、水田を放棄せざるを得なかったのであろう。

草本質泥炭の堆積の終わりは、常時、水を湛えた湿地帯の減少を意味する。すなわち、川の水が円滑に海に流出するように変化したといえる。当時の土木技術を考えれば、河川改修が行われたことも想像に難くない。湿地帯の水が引くと共に、急速に水田化が進むことが花粉分析･植物珪酸体分析から明らかになっている。そして、砂丘と丘陵の間の沖積地は、一面に水田が広がるような景観へと変化していったのであろう。

5　古墳時代中期・後期

古墳時代中期に入ると、集落の立地条件が一変する。中期以降の拠点的な集落である田伏遺跡（中期～後期）［関 1972］や一の宮遺跡（後期）［糸魚川市役所 1986］は、丘陵先端部に立地する。沖積地が湿地化及び水田化したのに伴い、小高い環境に居住域を移動させたのであろう。この頃から、沖積地の水田が著しく拡大し、集約的な生産を行う環境が整えられたと考えられる。少なくとも前期に見られたような、沖積地に集落が点在するような在り方から一変したと考えられる。ただし、このような遺跡立地の変化の背景は、環境とともに社会組織の変化についても考慮する必要があろう。いずれにせよ、糸魚川地域の土地利用の変化を知る上で、重大な画期と位置付けることができる。

6　古　　代

古代の遺物は数少ないが、いずれもⅡｂ層の最下位から出土しており、Ⅱｂ層堆積の開始年代を示すと考えられる。出土遺物は、主に須恵器杯の破片であるが、青海地区の西角地窯産のものが主体となる。古代の集落は、六反田南遺跡を除き、主に丘陵上に立地する。古墳時代以来、砂丘と丘陵端部の間の沖積地では、水田が営まれていたと考えられる。

7　中　　世

Ⅱｂ層からは、15 世紀代を中心とする遺物が多数出土した。出土した陶磁器の年代は、14 世紀後半～ 16 世紀第 1 四半期にまとまりがあり、16 世紀第 2 ～ 3 四半期には希薄となる。その後、16 世紀末～ 17 世紀代に再び増加し、18 世紀以降は再び希薄となる。このうち 15 世紀代の陶磁器が、質・量・種

類ともに最も充実しており、遺跡の中心となる時期であったと考えた。いずれも破片であるもののバラエティーに富み、生活雑器から香道具・茶道具などの奢侈品、城館や寺院等に特徴的に認められる瓦器［水澤 1999］も出土した（第 10 表）。陶磁器の構成から考えると、近隣に有力者が存在したことは確実と見られる。

時期	分類	器種 産地	供膳具						調理具	貯蔵具			その他								不明	合計 （破片数）
			天目	椀	皿	杯	盤	鉢	擂鉢 （片口鉢）	甕	壺	瓶	香炉類	茶入	蓋	灯明皿	火入	風炉 火鉢	匣鉢	転用		
中世	磁器	青花		7	15	1														1		24
		青磁		116	31		4	3					1		1					2	14	172
		白磁		7	63	9						1								1	5	86
		青白磁																		1		1
	陶器	舶載天目	10									1		1								12
		李朝陶器			5							2								1	1	9
		瀬戸美濃	61	37	123			17	1		4	28	15	4	1					4	11	306
		珠洲							483	ロクロ (R 種)118 タタキ (T 種)931 成形不明 30		2								15	25	1604
		越前						1	18	65										3	1	88
		信楽									14											14
	土器	瓦器																2	11			13
		土師質			497														1	1	14	513
近世	磁器	肥前系		51	58	5		4				12	1								4	135
	陶器	肥前系	1	107	117	1		20	25	15	4	8				1				1	6	306
		越中瀬戸	1	7	27				19		77								1			132
		瀬戸美濃			4							1									3	8
		京・信楽		1	1							2				1						5
		備前													2							2
		萩																				0
不明				1	1						1										11	14
合計			73	334	942	16	4	45	546	1259		57	17	5	4	2	0	2	13	30	95	3444

第 10 表　中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数（姫御前Ⅰ～Ⅲ － Ⅱａ層・Ⅱｂ層）

陶磁器のほかに、祭祀との関連が想定される銭貨、箸・形代（人形・舟形・刀形）・下駄等の木製品の存在も注目される。これらの遺物組成は、一般的な集落の在り方とは著しく異なる。加えて、ヒト焼骨が砕片の状態で散漫に出土したことも特筆される。このことは、近隣に葬送に関する場が存在したことを示している。ただし、調査対象地は墓域ではなく、水田であったことが植物珪酸体分析から明らかになっている。

それでは、どのような背景から、これらの遺物がもたらされたのであろうか。延徳 3（1491）年 3 月、管領家 細川政元にしたがって越後に下向した際に冷泉為広によって著された『越後下向日記』には、一行が糸魚川市寺町の観音寺に宿泊したことが記録されている。東北の馬を集めることを目的とした管領家の公的な旅の道中の宿とされたことは、糸魚川地域における観音寺の階層の高さを示している。『越後下向日記』が著された 15 世紀後半は、遺物量が最も多い年代と一致しており、近接する観音寺との関係について注意を払わなくてはならない。

観音寺は姫御前遺跡の西方 600m に位置する。観音寺により近い竹花遺跡では、姫御前遺跡を上回る質・量の遺物が出土しており、観音寺との関係を考慮しておくべきであろう。観音寺との直接的な関係にまでは言及できないものの、遺物の供給源は、観音寺が面する加賀街道周辺であったことは想像に難くない。いずれにしても、姫御前遺跡から出土した遺物群は、加賀街道沿いに展開した中世糸魚川町の隆盛ぶりを示すものである。そして、15 世紀代に築かれた中世の町が、近世の町の礎となったといえよう。したがって、現在、住宅地となっている加賀街道沿いに、中世の町並みが埋没している可能性が高いと言える。

要　　約

1　姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町二丁目 1069 番地 1 ほかに所在する。

2　調査は北陸新幹線の建設に伴い、2012 年度に実施した。調査面積は 227㎡である。2006 年度（調査面積 3,120㎡）、2008 年度（調査面積 3,680㎡）に続く 3 回目の調査で、調査面積の累計は 7,027㎡である。

3　遺跡は、海岸線から 350m 内陸の沖積地に立地し、遺構検出面の標高は約 4 mである。現在、遺跡周辺は平坦であるが、かつては起伏に富んだ地形であることが分かった。

4　調査によって中世と古墳時代の遺構・遺物を検出した。

5　中近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・瀬戸美濃・珠洲・越前・越中瀬戸・肥前系陶器・瓦器・土師器がある。これらの年代は、14 世紀後半～ 16 世紀第 1 四半期頃と 16 世紀末～ 17 世紀代にまとまりが認められた。植物珪酸体分析の結果、調査対象地周辺は水田であったと見られ、掘り込みを伴う遺構を検出することはできなかった。一方、箸は地面に突き刺さった状態で発見された。過去 2 回の調査結果を踏まえれば、水辺の祭祀が行われた可能性が高い。

6　弥生時代後期～古墳時代前期の集落の隣接地を調査した。ピット 4 基と土坑 1 基を検出し、土師器・横刃形石器、ヒスイ原石が出土した。

7　スギの樹根を 2 か所で検出した。枯死年代を調べるため、最外年輪から試料を採取して放射性炭素年代測定を行ったところ、弥生時代中期から後期頃及び弥生時代中期頃に相当する年代値（39calBC ～ 47calAD、342 ～ 115calBC）が得られた。この結果は、2008 年度調査で多量に出土したスギ材の枯死年代と近似しており、開墾された年代を反映する可能性がある。花粉分析・植物珪酸体分析によれば、これ以降、スギ林が減少していき、これと相反するように水田が広がっていくことが明らかとなっている。

引用・参考文献

相羽重徳　2003　「越中瀬戸広口壺に関する素描－県内出土報告例から－」『研究紀要』第４号　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

相羽重徳　2011　「第Ⅲ章姫御前遺跡 ３遺物 Ｂ土器・陶磁器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

相羽重徳ほか　2002　『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 113 集、新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

相羽重徳ほか　2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 226 集 竹花遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木重孝監修　1979　『糸魚川市史４　近世３－江戸後期（中）－』 新潟県糸魚川市役所

石川智紀ほか　2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 209 集 前波南遺跡Ⅱ・伝極楽寺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

糸魚川市役所　1986　『糸魚川市史 資料編１』考古編　糸魚川市市史編さん委員会監修　新潟県糸魚川市役所

今村　克・山岸洋一　2008　『須沢角地遺跡発掘調査報告書』 新潟県糸魚川市教育委員会

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

卜部厚志・高濱信行　2001　「正尺Ａ・正尺Ｃ遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの科学組成」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 12 年度』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

大橋康二　1989　『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55　ニュー・サイエンス社

小野正敏　1982　「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

荻野正博　1986　「第６章 荘園と武士　第２節 荘園と国衙領」『新潟県史』通史編１ 古代・原始　新潟県

春日真美　1998　「西頸城地域における古代土器様相」『研究紀要』第２号　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2008　「第Ⅴ章まとめ　６ 遺跡の存続期間」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 202 集 六反田南遺跡・前波南遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実ほか　2012　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 228 集 山岸遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学　2012　「糸魚川平野における環境変化と人々の営み－発掘調査結果と自然科学分析結果の総合的研究－」『第 24 回大会 研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会

加藤　学ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 184 集 姫御前遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学ほか　2011a　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤　学ほか　2011b　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 225 集 須沢角地遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金原正子　2011　「第Ⅴ章科学分析 １姫御前遺跡における自然科学分析Ａ花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 207 集 姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男　1975　「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27 － １　信濃史学会

木島　勉　2010　「山崎Ａ遺跡」『第 17 回遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

木村宗文　1986a　「第５章 律令制下の越後・佐渡国　第５節 交通と運輸」『新潟県史』通史編１ 原始・古代　新潟県

木村宗文　1986b　「第７章 古代の文化　第２節 神祀と仏教　１ 弥彦神社と居多神社」『新潟県史』通史編１ 原始・古代 新潟県

小池勝典ほか　2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 220 集 南押上遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1986　「第Ⅲ章遺跡各説　C. 岩野Ｅ遺跡　6. まとめ　b. 石器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 45 集中原遺跡・岩野Ａ遺跡・岩野Ｅ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 45 集　新潟県教育委員会

坂井秀弥　1996　「水辺の古代官衙遺跡 － 越後平野の内水面・舟運・漁業 － 」『越と古代の北陸』 小林昌二編　名著出版

佐藤友子ほか　2009　『田伏山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 205 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木郁夫　1983　「Ⅰ　地形分類図　1　地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査　糸魚川』 新潟県農地部総合整備課
鈴木郁夫　2000　「Ⅰ　概説　1. 地形概説」『新潟県地質図説明書（2000 年度版）』 新潟県商工労働部商工振興課
鈴木俊成ほか　1988　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 51 集 小出越遺跡』 新潟県教育委員会
鈴木俊成・高橋昌也ほか　1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 54 集 鰐口下遺跡・美山遺跡』 新潟県教育委員会
関　雅之　1972　『田伏玉作遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会
関　雅之　2004　「地域編 北陸Ⅱ 新潟県」『日本玉作大観』 寺村光晴編　吉川弘文館
千家和比古・山本　肇　1979　「第５章 西角地古窯跡」『大角地遺跡』 大角地遺跡発掘調査団編　新潟県青海町教育委員会
滝沢規朗　2005　「土器の分類と変遷 － いわゆる北陸系を中心に － 」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現（第１分冊）』 新潟県考古学会
滝沢規朗　2010　「山元遺跡と北陸の弥生後期」『第５回　年代測定と日本文化研究　シンポジウム予稿集』 シンポジム事務局・株式会社加速器分析研究所
土田孝雄　1978　「第２ 章 調査の経過　１発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会
土田孝雄ほか　1988　『須沢角地Ａ 遺跡発掘調査報告書』 新潟県青海町教育委員会
寺﨑裕助　1988　「第Ⅱ章 周辺の環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 50 集 原山遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
寺村光晴　1966　『古代玉作の研究』 吉川弘文館
寺村光晴　1986　「第４章 古墳時代の社会と文化　第４節 玉作と祭祀」『新潟県史』通史編１ 原始・古代　新潟県
寺村光晴ほか　1978　『笛吹田遺跡』 新潟県糸魚川市教育委員会
寺村光晴・安藤文一ほか　1979　『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』 新潟県青海町教育委員会
日本考古学会　1935　『考古学雑誌』第 25 巻第９号
能登　健　1974　「発掘調査と遺構の考察－いわゆる‘性格不明の落ち込み’を中心として－」『信濃』第 26 号第３号 信濃史学会
平野団三・渡辺秀雄　1986　「西頸城郡」『日本歴史地名大系 15　新潟県の地名』 平凡社
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
藤澤良祐　2009　「第１章 総論」『愛知県史』別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系　愛知県史編さん委員会　愛知県
水澤幸一　1999　「瓦器、その城館的なるもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第９集　帝京大学山梨文化財研究所
水澤幸一　2004　「15 世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』第 24 号　日本貿易陶磁研究会
水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一　2009　「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究』22　日本中世土器研究会
宮田進一　1997　「第４章第４節 越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』 北陸中世土器研究会　桂書房
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
山岸洋一　2010　「笛吹田遺跡」『第 17 回 遺跡発掘調査報告会』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山田英雄　1986　「第５章 律令制下の越後・佐渡国　第２節 国郡制の成立・整備」『新潟県史』通史編１ 原始・古代　新潟県
山本有紀ほか　2012　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 229 集 六反田南遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉田東伍　1907　『大日本地名辞書』 冨山房
米沢　康　1976　「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第 28 巻５号　信濃史学会
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻６号　信濃史学会

遺構観察表　土坑・ピット

※［　］は残存値。

遺構番号	グリッド	平面形態	断面形態	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	出土遺物	切り合い関係	備考
SK819	31A11、31Z15	方形か	台形状	［50］	78	43	3.87	土師器細片 2 点	-	
P806	31A6	円形	半円状	50	49	19	4.11	-	-	
P811	31A6	円形	U 字状	23	23	30	3.97	土師器細片 1 点	-	
P821	31Z10	楕円形	V 字状	［34］	30	27	3.97	-	-	
P824	31A12	円形	U 字状	16	16	17	4.1	-	-	

遺物観察表　中近世土器・陶磁器（1）

（胎土：石＝石英、長＝長石、白＝白色粒子、赤＝赤色粒子、骨＝海綿骨針、礫＝砂礫）

報告番号	分類		グリッド		層位	法量 (cm)			色調		胎土	製作痕跡	使用痕跡	備考
	種別	器形	大	小		口径	器高	底形	外面	内面				
1	瀬戸美濃焼	天目茶椀	28A	17	Ⅱb	12.2	-	-	黒褐 7.5YR3/1 ～ 7.5YR3/2	黒褐 7.5YR3/1 ～ 7.5YR3/2	灰白 10YR8/1 ナシ	(内外) 鉄釉	-	古瀬戸後期Ⅲ期 1420 ～ 40 年
2	瀬戸美濃焼	天目茶椀	31A	1	Ⅱb	12.6	-	-	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/2	灰白 10YR8/1 ナシ	(内外) 鉄釉	-	古瀬戸後期Ⅳ期古 1440 ～ 60 年
3	瀬戸美濃焼	天目茶椀	29A	16	Ⅱb	10.7	-	-	褐 10YR4/4	褐 10YR4/4	灰白 2.5Y8/1 ナシ	(内外) 鉄釉	-	大窯 4 期 1590 ～ 1610 年
4	青磁	厚釉端反椀	30A	22	Ⅱb	16	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 2.5Y7/1 ナシ	(内外) 青磁釉	-	上田 D- Ⅱ類 1430 年～ 15C 代
5	青磁	椀	29A	6	Ⅱb	-	-	7	オリーブ灰 5GY6/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(底外) 釉剥ぎ	-	-
6	青磁	雷文椀	28A	7	Ⅱb	15	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(外) 雷文帯	-	上田 C- Ⅳ類 15C 中～後半
7	青磁	直線箆線描蓮弁紋椀	29A	22	Ⅱb	-	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(外) 箆線描蓮弁紋	-	上田 B- Ⅳ類 15C 末～ 16C 前半
8	白磁	端反碗	30Z	15	Ⅱb	-	-	-	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	灰白 5Y7/1 ナシ	(内外) 施釉 (内) 沈線一条	漆継ぎ	森田 C 群 15C 前半
9	越中瀬戸焼	丸椀	29A	21	Ⅱa	-	-	4.8	暗褐 7.5YR	暗褐 7.5YR	にぶい褐 7.5YR6/3 石	(内外) 鉄釉 (底外) 削り出し高台	-	17C
10	越中瀬戸焼	天目茶椀	30Z	5	Ⅱa	10.8	-	-	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	黄灰 2.5Y6/1 ナシ	(内外) 鉄釉	-	17C
11	肥前系磁器	椀	31A	12	Ⅱb	12	-	-	灰白 N8/	灰白 N8/	灰白 10Y8/1 ナシ	(外) 呉須染付け	-	大橋Ⅱ期 1610 ～ 1650 年頃
12	肥前系陶器	鉄絵椀	31A	1	Ⅱa	11.2	-	-	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	灰白 2.5Y7/1 ナシ	(内外) 灰釉	-	大橋Ⅱ期 1610 ～ 1650 年頃
13	青磁	稜花皿	30A	1	Ⅱb	12.3	-	-	黄褐 2.5Y5/3	黄褐 2.5Y5/3	灰黄 2.5Y7/2 ナシ	(内外) 青磁釉 (外) 蓮弁文 (内) 波状櫛描き文	-	15C 末～ 16C 前半
14	青磁	稜花皿	29A	16	Ⅱb	12	-	-	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内外) 青磁釉 (口端) 輪花	漆継ぎ痕あり。	15C 末～ 16C 前半
15	青磁	腰折端反皿	31A	6	Ⅱb	-	-	-	オリーブ灰 10Y6/2	オリーブ灰 10Y6/2	灰白 5Y7/1 ナシ	(内外) 青磁釉	-	稜花皿の可能性あり。 15C 後半
16	白磁	八角杯	30Z	15	Ⅱb	8.2	-	-	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2 ナシ	(内・外) 施釉	-	森田 D 群 15C 末～ 16C 前半
17	白磁	内湾皿	30A	21	Ⅱb	10.2	-	-	灰黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/3	2.5Y8/2 ナシ	(内外) 灰釉 (底外) 削り出し高台	-	森田 D 群 15C 代
18	白磁	抉高台全面施釉皿	31A	1	Ⅱb	-	-	3	灰白 N8/	灰白 N8/	灰白 7.5Y8/1 ナシ	(内外) 透明釉 (外) 抉り高台	-	森田 D 群 15 世紀前半
19	青花	皿	31A	6	Ⅱb	10.9	-	-	灰白 10YR81	灰白 10YR81	灰白 7.5Y8/1 ナシ	(外) 呉須染付け	-	小野染付皿 C 群 15C 後半～ 16C 前半
20	瀬戸美濃焼	縁釉小皿	30A	21	Ⅱb	10.8	-	-	オリーブ黄 7.5Y6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3 ナシ	(口) 灰釉	-	古瀬戸後期Ⅳ期 1440 ～ 1480 年頃
21	瀬戸美濃焼	縁釉小皿	30A	6	Ⅱb 下	10.6	-	-	オリーブ黄 7.5Y6/3	オリーブ黄 7.5Y6/3	灰白 2.5Y7/1 ナシ	ロクロ成形 (底外) ロクロケズリ	-	大窯 1 期 1480 ～ 1530 年頃
22	瀬戸美濃焼	縁釉小皿	31A	1	Ⅱb	-	-	4.9	オリーブ黄 7.5Y6/3	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y8/1 ナシ	(外) 緑釉	(底外) 回転糸切り痕	大窯 1 期 1480 ～ 1530 年頃
23	土師質土器	皿 (ロクロ成形)	31A	12	Ⅱb	7.8	1.8	6	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2 石	ロクロ成形 (底外) 回転糸切り痕	(内・外) 摩耗	ロクロ 2 類
24	土師質土器	皿 (ロクロ成形)	30A	22	Ⅱb	11.8	-	-	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/1	浅黄橙 10YR8/1 赤	-	口縁端部にスス付着。	ロクロ 3 類
25	土師質土器	皿 (ロクロ成形)	29Z	10	Ⅱb	-	-	7	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2 石・長	ロクロ成形	(内・外) 摩耗	-
26	土師質土器	皿 (手づくね)	30A	16	Ⅱb	8.8	-	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄 2.5Y6/3 ナシ	(外) 指頭圧痕	(内・外) スス	手づくね 2 類
27	土師質土器	皿 (手づくね)	31A	6	Ⅱb	9.9	-	-	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	褐灰 10YR4/1 ナシ	(外) 指頭圧痕	(内外) スス付着 (内) 漆付着	手づくね 2 類
28	土師質土器	皿 (手づくね)	29A	1	Ⅱb	12.9	-	-	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR8/2	灰白 10YR8/2 赤	手づくね	外面摩耗。	手づくね 5 類
29	土師質土器	皿 (手づくね)	28A	2	Ⅱb	14.4	-	-	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	暗灰黄 2.5Y5/2 ナシ	(外) 指頭圧痕	外面摩耗。	手づくね 5 類 15 世紀代
30	肥前系磁器	皿	30A	2	Ⅱa	11.9	-	-	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	灰白 5Y8/2 ナシ	(内外) 透明釉	-	17C 前半
31	瀬戸美濃焼	水注	31A	7	Ⅱb	-	-	5.8	オリーブ黄 5Y6/4	オリーブ黄 5Y6/3	灰白 2.5Y7/1 ナシ	ロクロ成形 (底外) 糸切り痕	-	
32	青磁	盤	30Z	15	Ⅱb	-	-	-	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY7/1	灰白 N8/ ナシ	(内・外) 青磁釉 (内) 蓮弁紋	-	姫御前遺跡Ⅱ報告 No.75 を参考に図化。

遺物観察表　中近世土器・陶磁器（２）

（胎土：石＝石英、長＝長石、白＝白色粒子、赤＝赤色粒子、骨＝海綿骨針、礫＝砂礫）

報告番号	分類		グリッド		層位	法量 (cm)			色調		胎土	製作痕跡	使用痕跡	備考
	種別	器形	大	小		口径	器高	底形	外面	内面				
33	瀬戸美濃焼	椀形鉢	29A	16	Ⅱb	-	-	-	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄 2.5Y6/4	灰白 2.5Y8/2 ナシ	(外) ロクロケズリ (内・外) 灰釉	-	古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期
34	肥前系磁器	鉢	31Z	5	Ⅱa	15.8	-	-	灰白 2.5GY8/1	灰白 2.5GY8/1	灰白 N8/ ナシ	(内外) 透明釉 (内) 染付	-	大橋Ⅱ -2 1630 ～ 1650 年代
35	瓦器	風炉	29Z	25	Ⅱb	-	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4 石・長	ロクロ成形 (外) 突帯一条	-	水澤Ⅴ類か 14C 末～ 16C 前半
36	瓦器	風炉	28A	17	Ⅱb	-	-	-	橙 5YR6/6	黒褐 2.5Y3/1	にぶい橙 7.5YR7/3 石・長・礫	(外) 突帯二条、格子文＋蓮弁紋	-	水澤Ⅱ類 14C 末～ 16C 前半
37	珠洲焼	甕 (T 種)	29Z	5	Ⅱb	45.4	-	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1 石・白・骨・礫	叩き成形 (口縁) ロクロ成形	-	吉岡Ⅳ 2 期 14C 第 2 四半期
38	珠洲焼	甕 (T 種)	29Z	20	Ⅱb	44.4	-	-	灰 N6/1	灰 N5/1	灰 N6/1 石・骨・礫	叩き成形 (口縁) ロクロ成形	-	吉岡Ⅴ期 14C 後半～ 15C 前半
39	珠洲焼	甕 (T 種)	29A	1	Ⅱb	-	-	-	灰 N6/	灰 5Y6/1	灰白 N7/ ナシ	叩き成形	-	-
40	珠洲焼	甕 (T 種)	28A	17	Ⅱb	-	-	10.5	灰 N6/	灰 5Y6/1	灰 7.5Y6/1 石・骨・礫	叩き成形	(内・底外) 摩耗 (内) スス	-
41	珠洲焼	小壺 (R 種)	28A	17	Ⅱb	-	-	7	灰 N6/	灰 N4/	灰 N5/ 石・骨・礫	(底外) 静止糸切り痕	-	-
42	越中瀬戸焼	広口壺	29Z	25	Ⅱb	9.4	-	-	灰褐 7.5YR4/2	褐 7.5YR4/3	にぶい黄橙 10YR6/3 石・長・礫	ロクロ成形 (内外) 鉄釉	(口端) 摩耗	17C
43	越中瀬戸焼	広口壺	30A	11	Ⅱa	11	-	-	黒褐 7.5YR3/2	黒褐 7.5YR3/2	にぶい黄橙 10YR7/2 長	(内外) 鉄釉 (外面に一部灰釉。)	口縁端部磨耗。	17C 頸部径：11.5cm
44	越中瀬戸焼	広口壺	27A	16	Ⅱa	-	-	10	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/2 石・長・砂	(内外) 鉄釉 (底外) 糸切り痕	底外の縁が磨耗。	17C
45	珠洲焼	片口鉢	29A	17	Ⅱb	-	-	-	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	灰 5Y6/1 石・骨・礫	(口端) 波状文	-	吉岡Ⅴ期 14C 末～ 15C 前半
46	珠洲焼	片口鉢	29A	11	Ⅱb	-	-	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	灰 5Y6/1 石・骨・礫	(内) 卸目 6 条以上一単位	-	吉岡Ⅴ期 14C 末～ 15C 前半
47	珠洲焼	片口鉢	29A	7	Ⅱb	-	-	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1 灰 N5/	灰 5Y6/1 石・骨・礫	(口端) 波状文 (内) 卸目 10 条一単位	-	吉岡Ⅴ期 14C 末～ 15C 前半
48	珠洲焼	片口鉢	29A	21	Ⅱb	36	-	-	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1 石・骨・礫	(口端) 波状文	-	吉岡Ⅴ期 14C 末～ 15C 前半
49	珠洲焼	片口鉢	29A	21	Ⅱb	37.6	-	-	灰 N5/	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1 石・骨・礫	(口端) 波状文 (内) 卸目	-	吉岡Ⅴ期 14C 末～ 15C 前半
50	珠洲焼	片口鉢	28Z	10	Ⅱb	-	-	14.4	灰 N6/	灰 N6/	灰 N5/ 石・骨・礫	(内) 卸目	(内・底部外) 摩耗	
51	越中瀬戸焼	擂鉢	30A	2	Ⅱb	-	-	12	灰褐 7.5YR4/2	灰黄褐 10YR5/2	灰白 10Y7/1 長	(内外) 鉄釉 (内) 擂り目	内面の磨耗顕著。	17C
52	珠洲焼	加工円盤	30A	7	Ⅱb	-	-	-	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1 石・礫	叩き成形	-	加工円盤 直径 2.4cm。
53	珠洲焼	加工円盤	30A	22	Ⅱb	-	-	-	灰 N5/	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1 石・骨・礫	叩き成形	-	加工円盤 直径 2.9cm。
54	肥前系	皿	30A	2	Ⅱa	-	-	4.7	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	灰黄 2.5Y6/2 ナシ	(内外) 灰釉 (内) 蛇ノ目状釉剥ぎ (外) 削り出し高台 (ロクロの回転方向左)	-	大橋Ⅲ期～Ⅳ期 加工円盤
57	須恵器	無台杯	30Z	15	Ⅱb	11.8	-	-	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1 石・白・骨	ロクロ成形 (ロクロの回転方向は右)	-	西角地窯跡産と類似。

遺物観察表　弥生時代～古墳時代土器

（胎土：石＝石英、長＝長石、雲＝金雲母、赤＝赤色粒子、礫＝砂礫）

報告番号	種別	遺構		グリッド		層位	法量（㎜）			色調		胎土	調整		炭化物	備考
		種別	番号	大	小		口径	器高	底形	外面	内面		外面	内面		
58	甕 (B 類)	-	-	30A	21	Ⅲ	19.2	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石・礫	ナデ	ナデ	-	頸部径：14.5㎝
59	甕 (C2 類)	-	-	30A	16	Ⅲ	20.9	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3 石・赤・礫	ナデ	ナデ	-	頸部径：17.5㎝ (内外) 摩耗
60	甕 (C3 類)	-	-	30A	12	Ⅱb 下	13	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3 石・赤・礫	ナデ	ナデ	-	-
61	甕 (C3 類)	-	-	25A	11	Ⅲ	22	-	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3 石・長・雲・礫	ハケ	ハケ	外面	
62	壺 (L1 類)	-	-	29A	2・6	Ⅲ	11.6	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3 石・礫	ナデ	ハケ	-	頸部径：7.7㎝ 7 期 (滝沢 2005)
63	壺	-	-	31Z	11	Ⅲ	-	-	-	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4 石・礫	ナデ	ナデ	-	-
64	壺	-	-	31Z	11	Ⅲ	14	-	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4 石	付加状口縁 ナデ	ナデ	-	-
65	壺	-	-	30Z	10	Ⅲ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3 石・長・礫	ハケ	ナデ	-	頸部径：11.0㎝
66	壺	-	-	30A	7	Ⅲ	-	-	5.3	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄 2.5Y6/3 石・長・礫	ナデ	ハケ	-	(底外) 黒斑
67	高坏 器台	-	-	29Z	25	Ⅲ	14.6	-	-	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	灰白 7.5YR8/2 石	ミガキ	ミガキ	-	(内外) 赤彩 (外) 黒斑
68	高坏	-	-	29A	21	Ⅲ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3 石・礫	ミガキ	ナデ	-	(外) 摩耗
69	高坏	-	-	29A	16	Ⅲ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3 石・長・礫	ミガキ	ナデ	-	(外) 摩耗
70	高坏	-	-	27A	21	Ⅲ	-	-	-	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3 石・礫	ナデ	ナデ	-	(外) 摩耗
71	高坏	-	-	30A	17	Ⅲ	-	-	-	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/3 石・礫	ナデ	ナデ	-	穿孔 1 か所
72	高坏 器台	-	-	29Z	25	Ⅲ	-	-	10.8	明黄褐 10YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4 石	ナデ	ナデ	-	(外) 摩耗
73	高坏 器台	-	-	29A	22	Ⅲ	-	-	14.8	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2 石	ミガキ	ミガキ	-	穿孔 (内外) 赤彩

遺物観察表　石器・石製品、鍛冶関連遺物

報告番号	種別	分類	石質	遺構	グリッド		層位	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）	備考
					大	小						
75	貝殻状剥片	-	安山岩	-	31A	1	Ⅲ	65	78	16	91	
76	横刃形石器	微細剥離痕	ヒン岩	-	30A	11	Ⅱb	90	126	14	181.9	
77	石核	貝殻状剥片石核	安山岩	-	28A	7	Ⅲ	94	171	40	750	
78	石核	貝殻状剥片石核	流紋岩	-	31A	1	Ⅲ	92	76	25	243.9	
79	敲石	-	砂岩	-	28A	7	Ⅲ	173	77	58	1000	
80	原石	-	ヒスイ	-	31A	12	Ⅲ	16	9	6	1.4	
86	土製品	羽口	-	-	29Z	20	Ⅱa	48	52	31	65.0	
87	鍛冶関係	鉄滓	-	-	29A	7	Ⅱb	100	74	38	331.7	

遺物観察表　銭貨

報告番号	銭貨名	書体	王朝	初鋳年	グリッド		層位	外形縦	外形横	内径縦	内径横	銭厚	重さ（g）	備考
					大	小								
81	天聖元寶	篆書	北宋	1023	30A	21	Ⅱb	24.6	24.5	5.8	5.9	1.3	3.48	
82	嘉祐通寶	篆書か	北宋	1056	29A	21	Ⅱb	24.3	24.1	7.5	7.7	1.2	3.05	
83	熙寧元寶	真書	北宋	1068	29A	17	Ⅱb	24.3	[21.1]	6.7	6.9	1.2	2.00	
84	熙寧元寶	真書	北宋	1068	28A	21	Ⅱb	23.3	23.5	5.9	5.8	1.4	3.26	
85	政和通寶	篆書	北宋	1111	31A	6	Ⅱb	24.8	25.0	6.4	6.4	1.6	2.65	

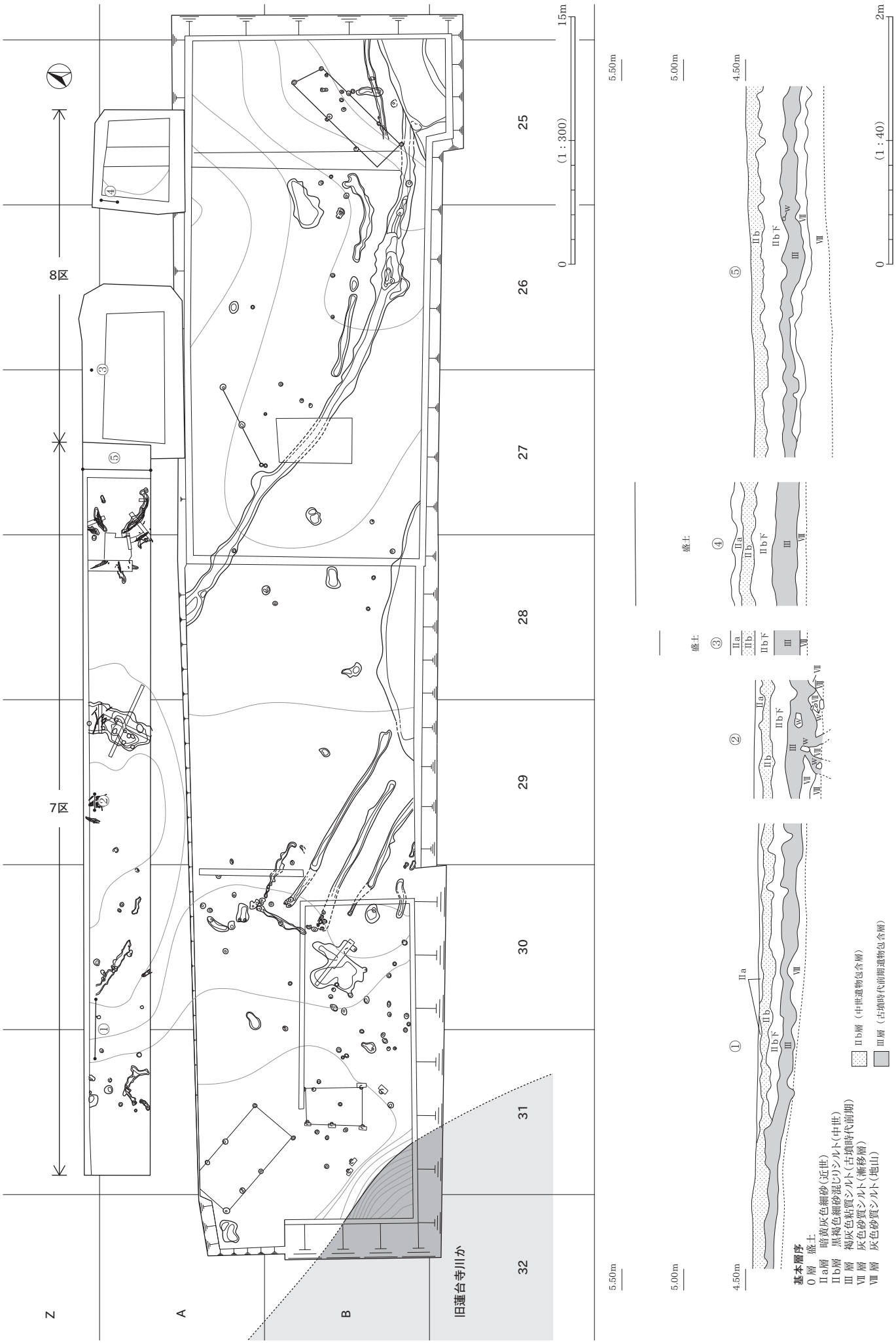
遺物観察表　木製品

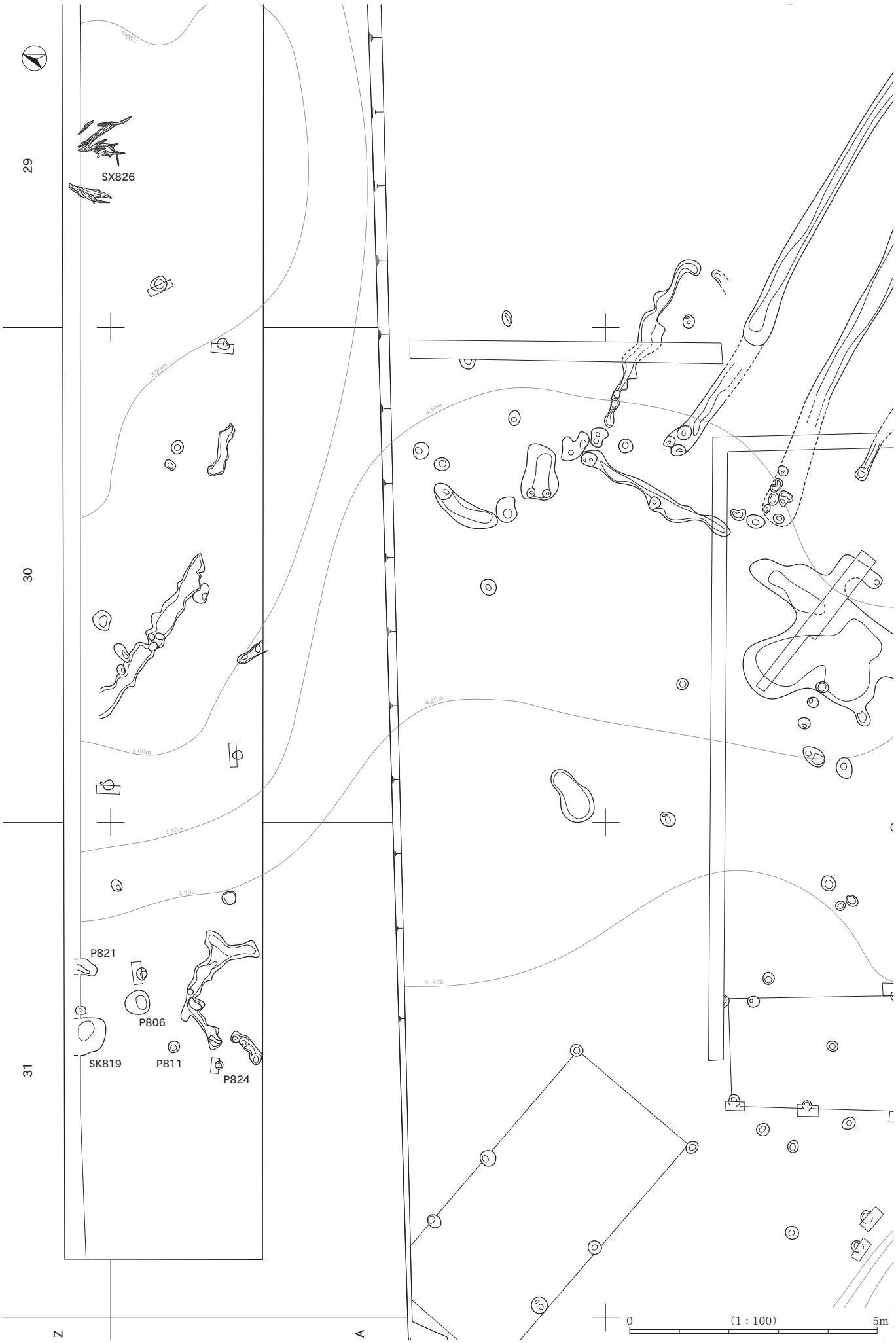
報告番号	形状	樹種	木取り	遺構番号	グリッド		層位	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	備考
					大	小					
88	箸状	スギ	削出	SX800	28A	22	Ⅱb	236	6	5	
89	箸状	スギ	削出	-	29A	1	Ⅱb	100	6	4	

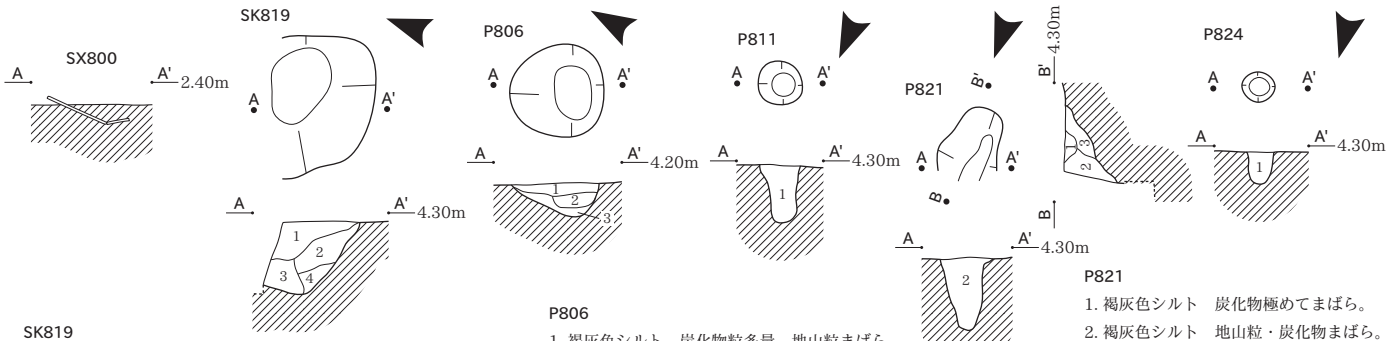
図　　版

姫御前遺跡Ⅰ　2006年度調査
姫御前遺跡Ⅱ　2008年度調査
姫御前遺跡Ⅲ　2012年度調査
市道蓮台寺線
旧蓮台寺川か
市道系魚川東小学校寺町線
R1-1
R2-4
小グリッド
(1：500)
0
20m

2012年度調査区　全体図




29
30
31
SX826
P821
P806
SK819
P811
P824
3.90m
4.00m
4.10m
4.20m
4.30m
Z
A
0
(1 : 100)
5m



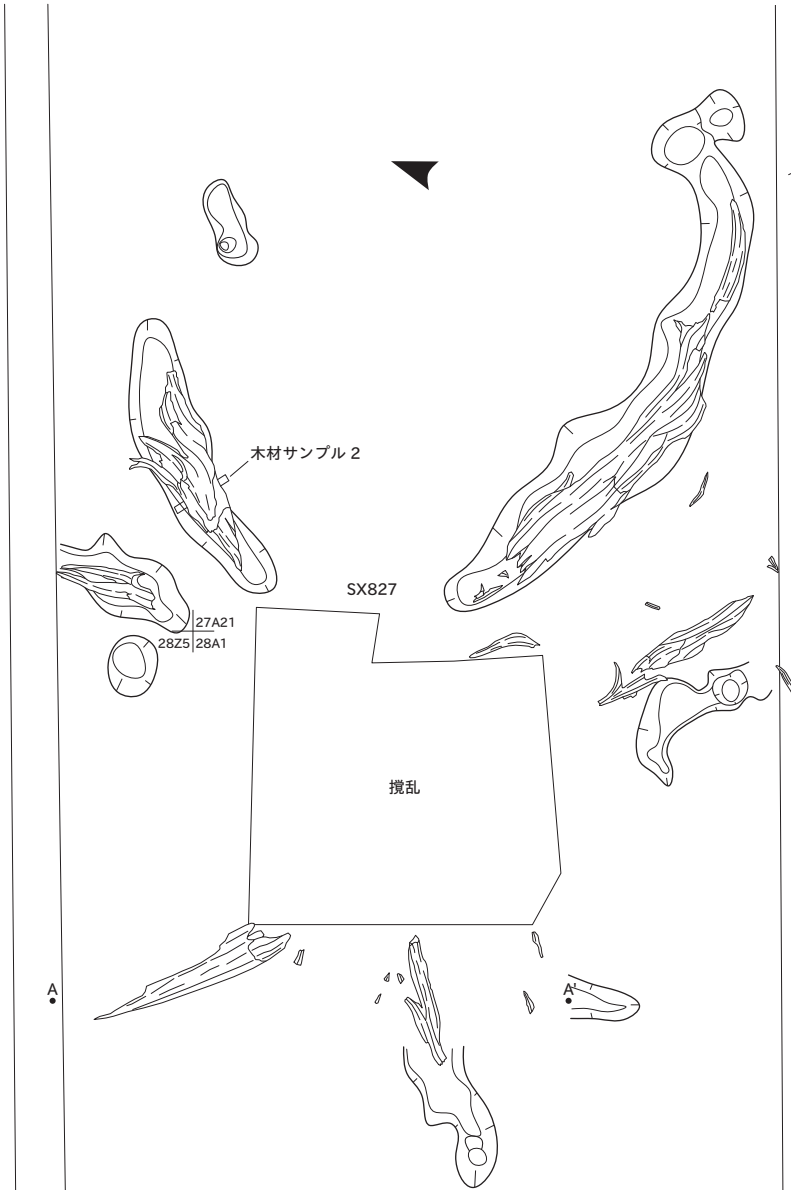
SK819
1. 褐灰色砂質シルト　土師器細片が微量出土。
2. 灰色砂質シルト　地山土が主体。
3. 褐灰色シルト　1層と似るが、1層より地山粒を含み、しまり弱い。
4. 灰黄褐色砂質シルト　2層よりしまりやや弱い。

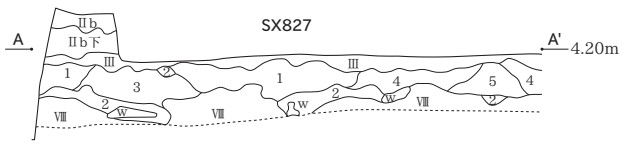
P806
1. 褐灰色シルト　炭化物粒多量。地山粒まばら。
2. 褐灰色シルト　炭化物粒極めてまばら。地山粒多量。
3. 灰黄褐色砂質シルト　炭化物粒極めてまばら。Ⅲ層とⅣ層の混土。

P811
1. 黒褐色シルト　粘性やや強い。炭化物粒まばら。

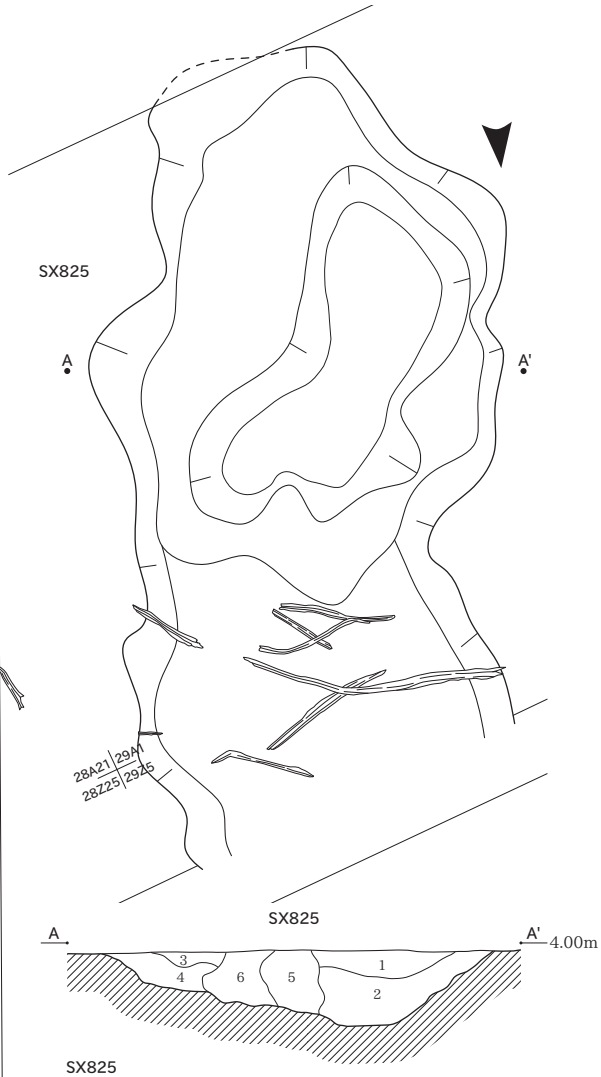
P821
1. 褐灰色シルト　炭化物極めてまばら。
2. 褐灰色シルト　地山粒・炭化物まばら。
3. 褐灰色シルト　地山ブロック含む。
　1・2層より色調明るい。

P824
1. 黒褐色シルト　炭化物粒まばら。

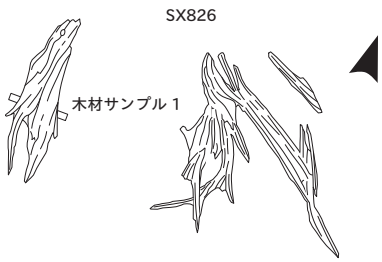




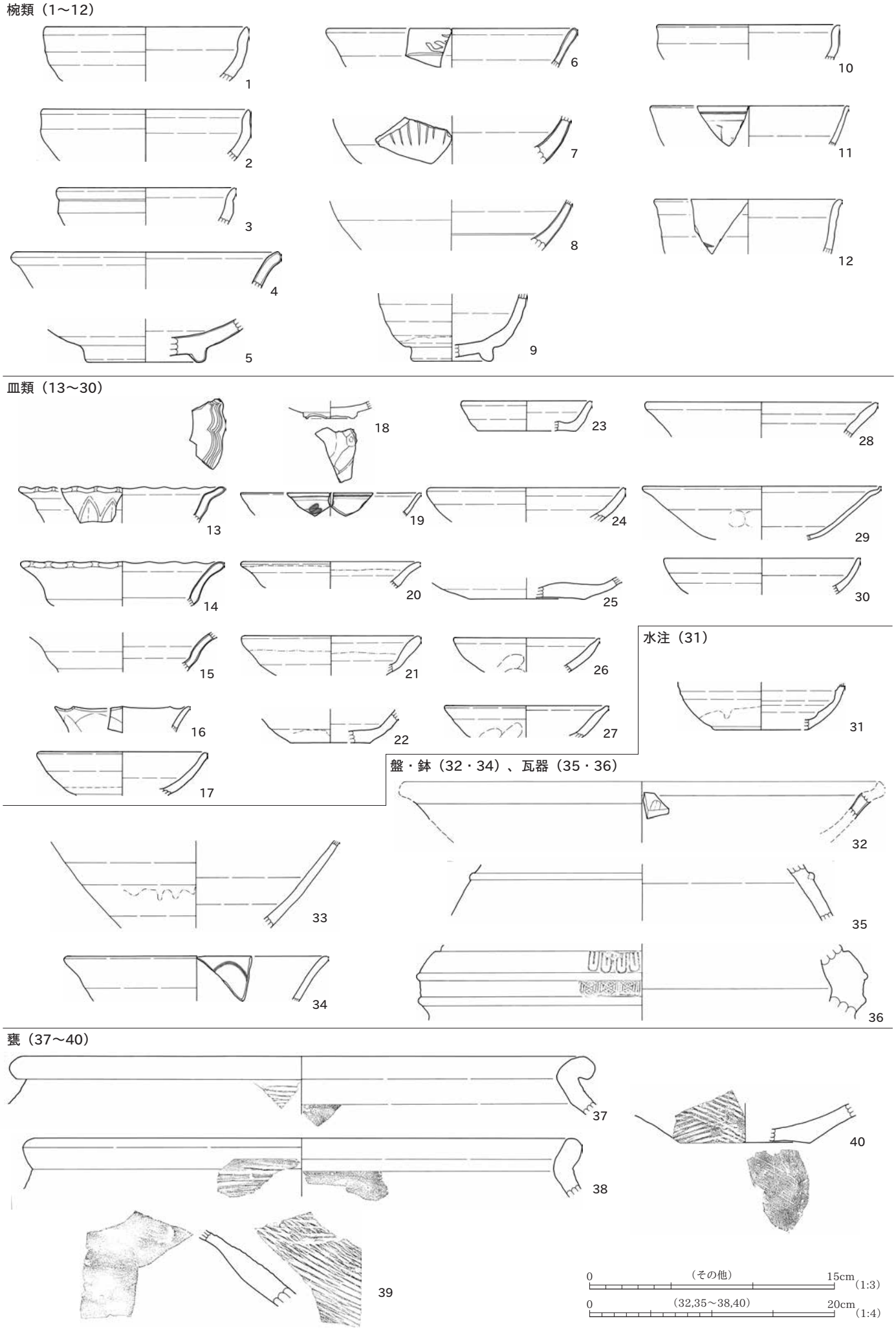
SX827
1. 灰色砂質シルト　地山土が主体。Ⅲ層土ブロックがまばら。
2. 灰黄褐色シルト　樹根が土壌化。粘性やや強い。2層には樹根が残る。
3. 灰色砂質シルト　地山土が主体。1層よりⅢ層土が多い。
4. 褐灰色シルト　1層・5層より色調暗い。Ⅲ層土が主体。地山ブロックまばら。
5. 灰黄色砂質シルト　Ⅲ層とⅧ層の混土。



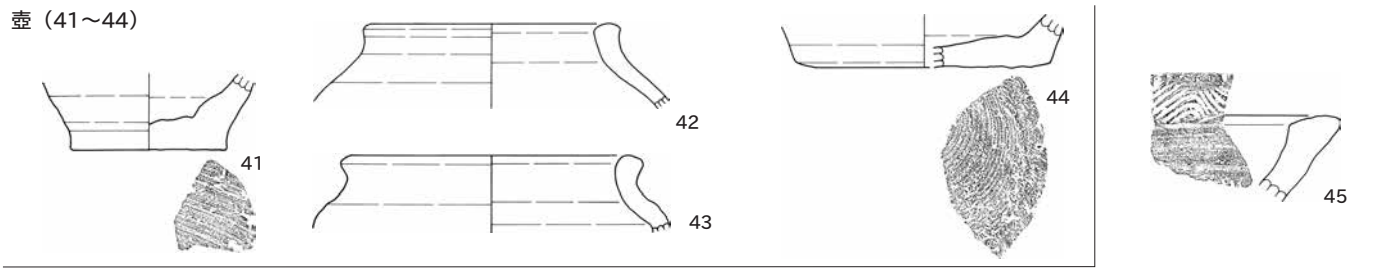
SX825
1. 黒褐色シルト　粘性強く。地山粒極めてまばら。
2. 黒褐色シルト　1層より地山粒を多く含む。
3. 褐灰色シルト　1層より色調明るい。地山ブロック多量。
4. 褐灰色シルト　3層より色調暗い。3層より地山ブロック少ない。
5. 灰色砂質シルト　地山土が主体、樹根混入。炭化物極めてわずか。
6. 灰色砂質シルト　地山と似るが、樹根に由来する土壌が含まれる。



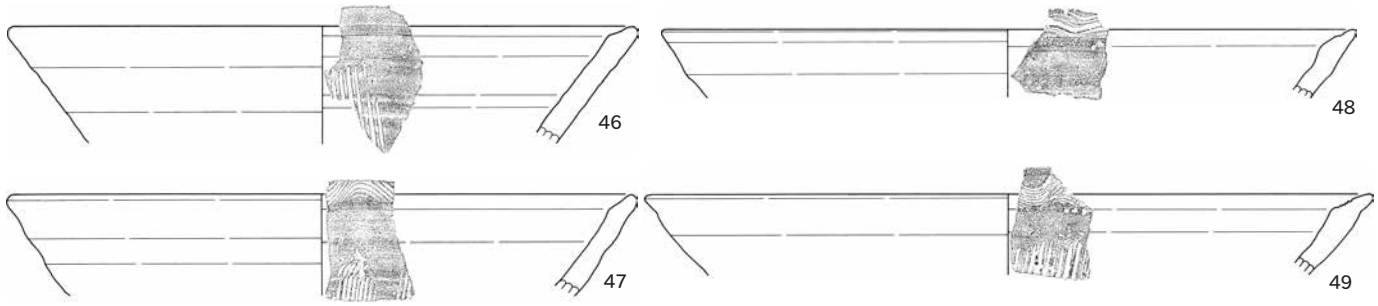
0　(1：40)　2m

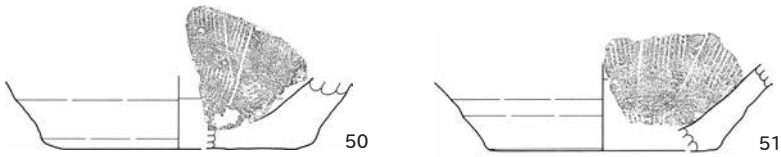

椀類（1～12）
皿類（13～30）
水注（31）
盤・鉢（32・34）、瓦器（35・36）
甕（37～40）
（その他）
0
15cm
(1:3)
（32,35～38,40）
0
20cm
(1:4)

壺（41～44）

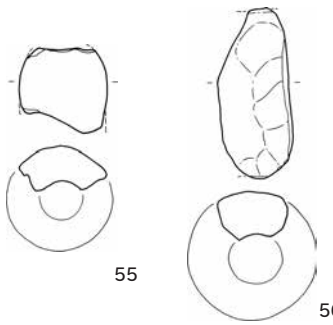


片口鉢・擂鉢（45～51）

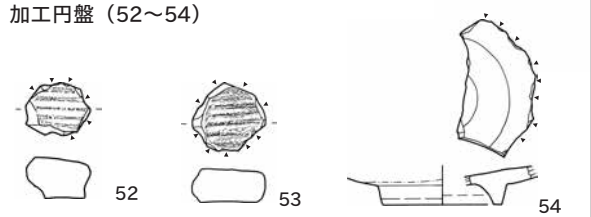




土錘（55・56）

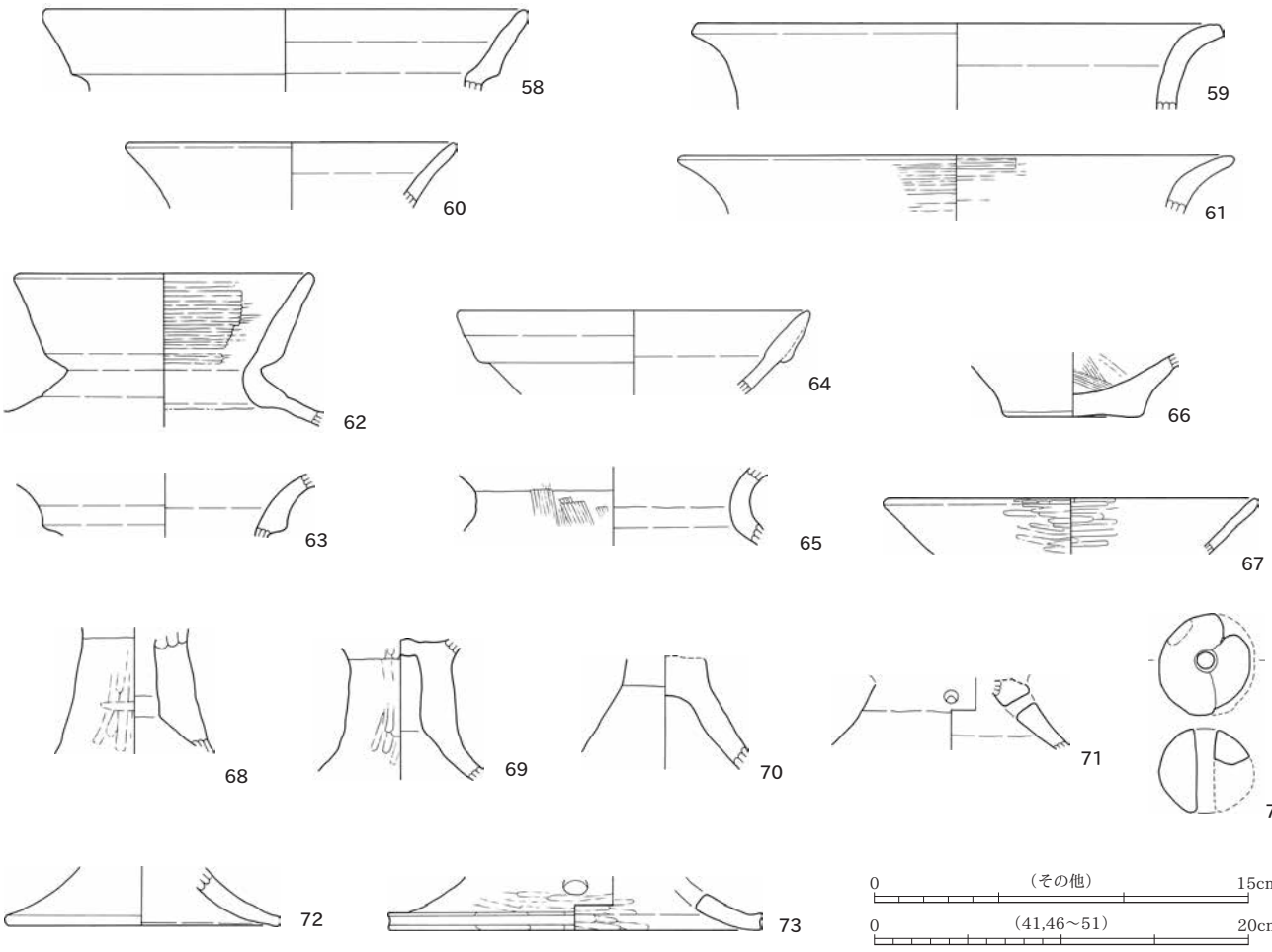


加工円盤（52～54）

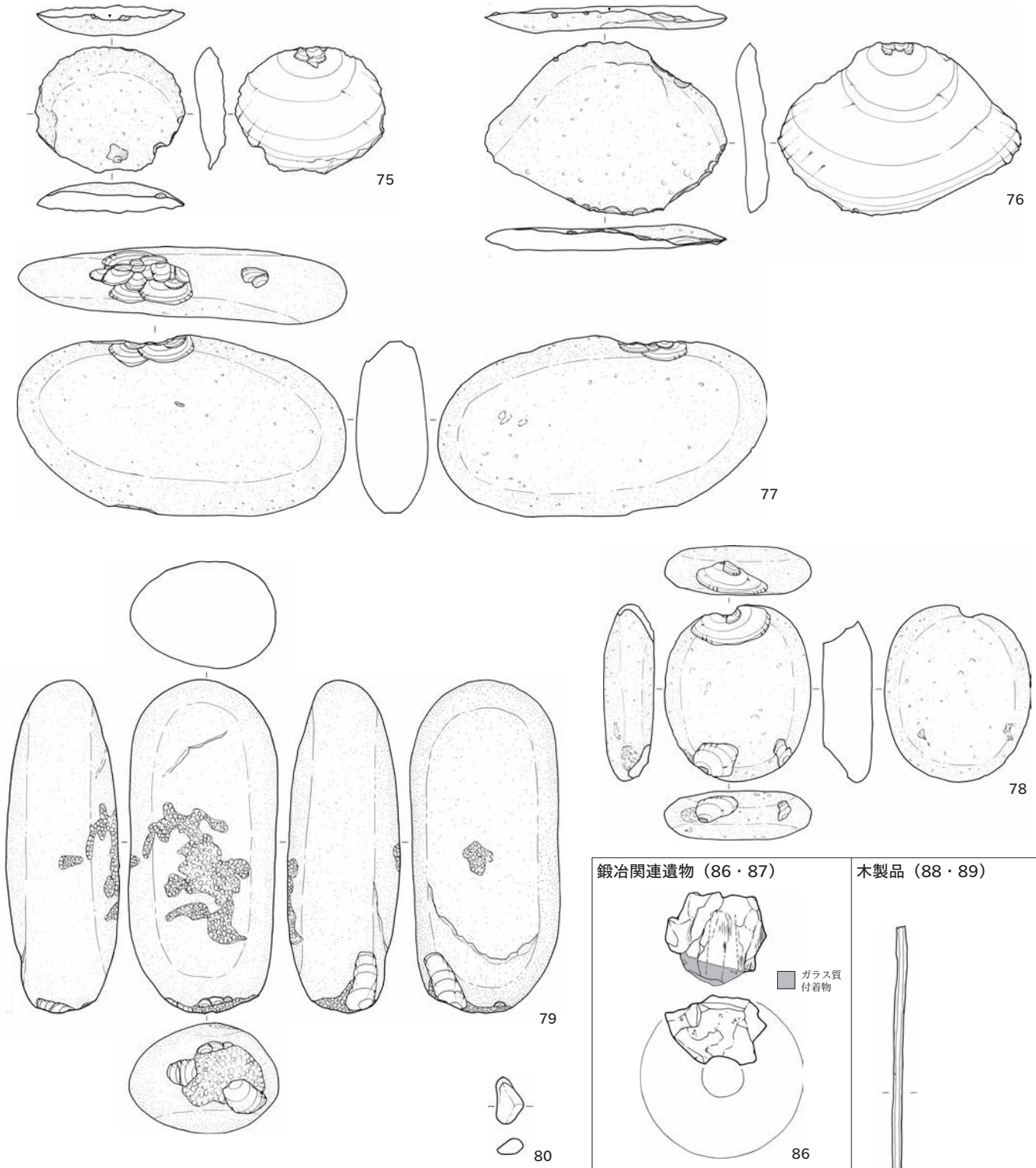


古代の土器（57）

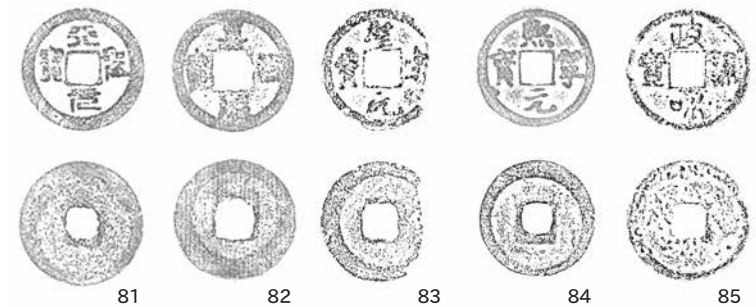
弥生時代から古墳時代の土器（58～74）



石器・石製品（75～80）



銭貨（81～85）



鍛冶関連遺物（86・87）

木製品（88・89）

0　（81～85）　6cm　(2:3)

0　（80）　10cm　(1:2)

0　（その他）　15cm　(1:3)

遺跡近景（東から、2008年撮影）

7 区　全景（西から）

遺跡近景（西から、2008年撮影）

遺跡近景（西から）

7区　全景（東から）

8区　全景（南東から）

樹根SX827　検出状況（北から）

樹根SX827　検出状況（南東から）

基本層序②・樹根SX826　検出状況（南から）

樹根SX826　検出状況（南東から）

SX825　検出状況（南西から）

SX825　完掘（南から）

P806　断面（西から）

P806　完掘（西から）

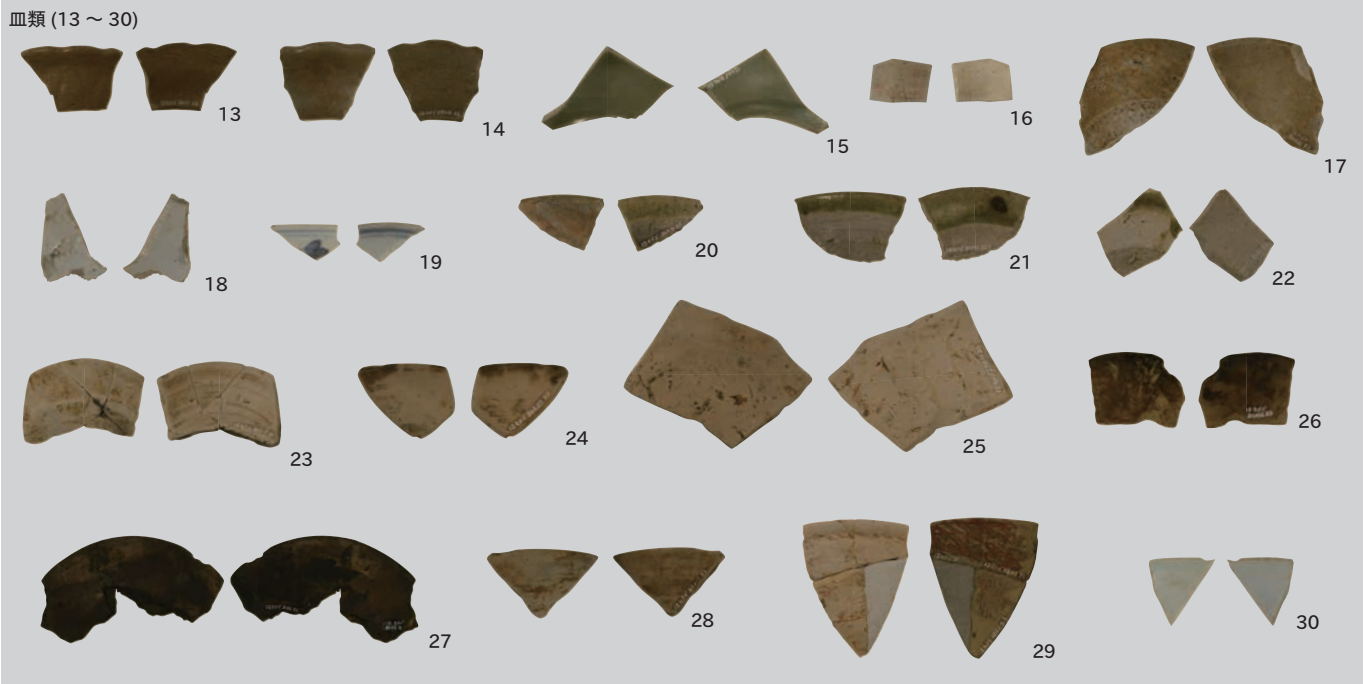
P811　断面（北から）

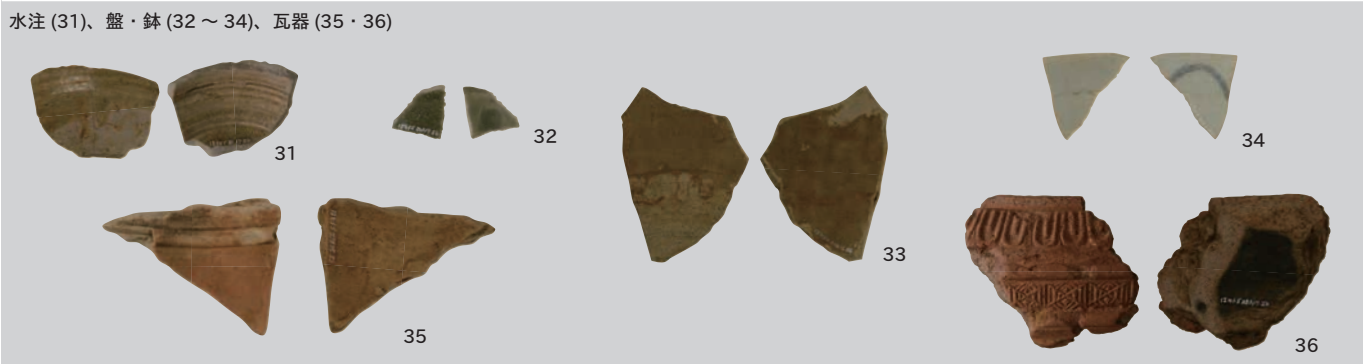
SK819　断面（西から）

箸状木製品（88）　出土状況（西から）

銭貨（81）　出土状況（南から）

椀類 (1 ～ 12)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

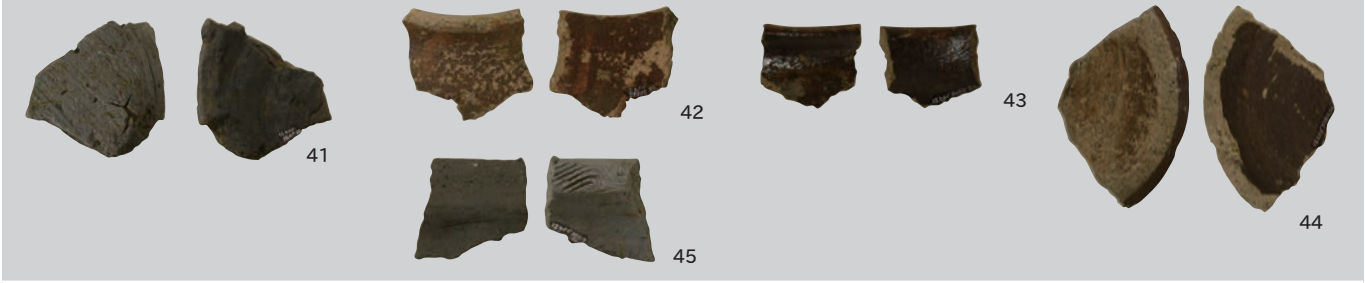

皿類 (13 ～ 30)
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30


水注 (31)、盤・鉢 (32 ～ 34)、瓦器 (35・36)
31
32
33
34
35
36

甕 (37 ～ 40)
37
38
39
40

1～40　〔1:3〕

壺 (41 ～ 44)



片口鉢・擂鉢 (45 ～ 51)

土錘 (55・56)

加工円盤 (52 ～ 54)

古代の土器 (57)

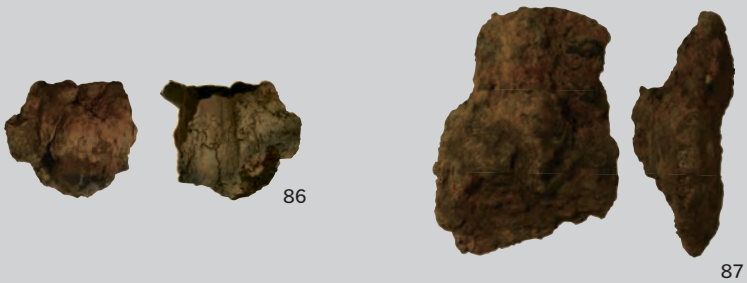
弥生時代から古墳時代の土器 (58 ～ 74)

41～74　〔1:3〕

石器・石製品 (75 ～ 80)

銭貨 (81 ～ 85)

鍛冶関連遺物 (86 ～ 87)



木製品 (88 ～ 89)

80 〔1:1〕
81～85 〔2:3〕
その他 〔1:3〕

報告書抄録

ふりがな	ひめごぜいせきさん
書　　名	姫御前遺跡Ⅲ
副 書 名	北陸新幹線関係発掘調査報告書
巻　　次	ＸＸⅢ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 244 集
編著者名	加藤学（埋文事業団）、石垣義則（株式会社ノガミ）、株式会社加速器分析研究所
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒 956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2013（平成 25）年 3 月 22 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひめごぜいせき 姫御前遺跡	にいがたけんいとい がわし 新潟県糸魚川市 ひがしてらまち 東 寺町二丁目 1069 番地 1 ほか	15216	24	37° 02′ 33″ （新座標）	137° 52′ 24″ （新座標）	20120702 ～ 20120824	227㎡	北陸新幹線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姫御前遺跡	遺物包含地	中世～近世		陶磁器（青磁・白磁・青花・瀬戸美濃・珠洲・越中瀬戸・肥前系磁器・土師器）、土錘、銭貨、鉄滓、木製品	
	集落跡	弥生時代後期～古墳時代前期	ピット 4 基 土坑 1 基	土師器、石器（横刃形石器・敲石）	検出したスギの樹根について放射性炭素年代測定を行った。その結果、弥生時代中期～後期頃に枯死していることが分かった。この頃に開墾が行われた可能性がある。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 244 集

北陸新幹線関係発掘調査報告書ＸＸⅢ

姫御前遺跡Ⅲ

平成 25 年 3 月 21 日印刷
平成 25 年 3 月 22 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025(285)5511

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250(25)3981
FAX　0250(25)3986

印刷・製本　株式会社　ハイングラフ
〒 950-2022　新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
電話　025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第244集『姫御前遺跡Ⅲ』　正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３７度０２分３３秒	３７度０２分４４秒
抄録	東経	１３７度５２分４４秒	１３７度５２分１５秒